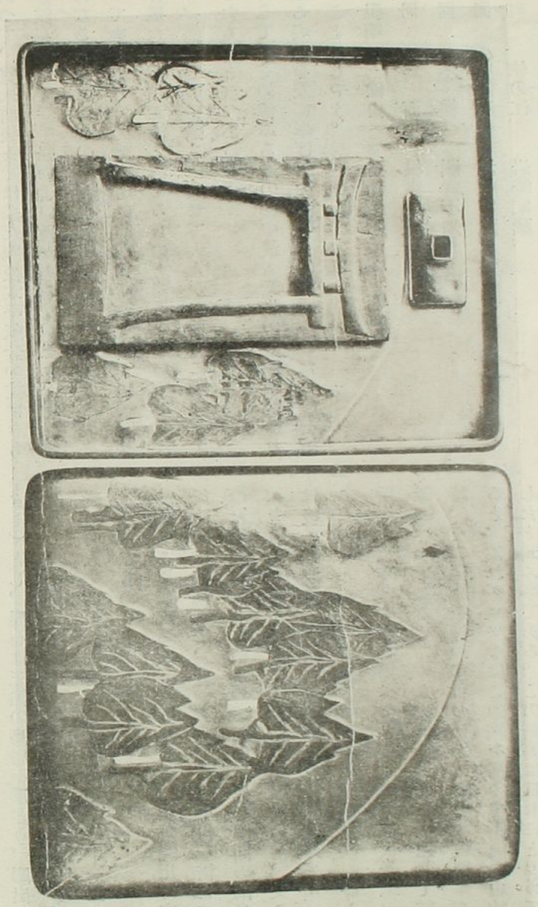
自娛小録

三

昭和六年六月上浣起筆

特別
イ4
1919
432



（井光）　蒔絵　石書棚

38- 9218

176697

自撰小録　三

昭和六年六月上旬起筆

○昨年末から北海新報に掲載を約束した余の漫筆は来七月初旬をもつて二百回となる筈だが、原稿は北海やっと書き上げた。二百回二百日に渡り、一回平均二百五六十件あるとすれば、新聞の一隅四寸乃至五寸幅にて六段ぬきとあるから一本の組五百頁の随筆が半歳あつて出来上つた訳である。既刊の随筆をおよそ執筆した半歳

位の変してゐる。毎日新聞に連載することゝ、随筆として一部の本を作ることゝは越きと異すし、ならえ日々面白を表して。種々の後者の越味を投することを庶幾とするから、此点は一部の隨筆を編するのも、やり方が異ることゝ思べてゐる。或は二回或は三回四回にてゐる表は毎日あるが、成るべく出番を避けて欲しいとの載せることゝ約束してあるので、此点も隨筆を書す様えと趣が異ってゐる。書物としての隨筆ではなく、一所に集めるが新しい寄せて出来た物ことゝ思ふ。多数の方が後者の俗風を避けることゝする。

樣原製

用を毎日〳〵財産して組合いをすることも厄介のことである。材料は既刊の四五種の隨筆をあることゝ一切避けたが、種々の飾り上等でいふへの自然田舎の人を相手にする記事だから、また相手のものが多くてゐる。高は郷土を後者としてあるから自然郷土里を関係のあることが自然多くなる。自分の経歴と関することとなるとは、敢て自家宣伝の為めでなく、己れを衒ふのでいふへが、郷土を後者としてあるから、可成多く載せてある。文と云ふと己れの自分の体験したことや己れ自分から人と交つて見聞したことでなくしてと書いて見て面白味がある。自分としても美等を素憲する

とすると筆が進まぬから、自然自家の経歴かハつて来る、或ハ自家の談を語つたり、或ハ交りの深かつた故人を語つたり。数を尋ねた先輩のを語つたり。自分の先輩の業績を語つたり。自分の趣味を語つたりする。自分の経歴と謂へども、その行ふも私的記録の如き何物かである。これを顕す為めに決して偏してゐる為めである。何人の随筆に於ても自家の経歴を離れて書き難いことである。強へて之れを没却して随筆に筆を進めてゐるのハ、自分の既刊の随筆にも自家の経歴を明すまでを少からず載せてゐるが、此の漫談も

標原製

一部の随筆と呼び得べくんば、郷里に関する自分の経歴が最も多く収めてあることが出来よう。但しこの随筆ハ刊行を望むことがあつても許さるゝ積りである。郷里に発行する三萬枚の紙に自分のことが傳へられんが為めに満足するのだ。未来無窮の務めもそこに。日々勝手なことを書くのハ敢て炊事を覚へもしないが、半歳以上ブツ倒けハ、一寸容易でないこと。

六月七日記

○近来大阪の料理が東京に劣て居ることハ夢にも記したが、現に紙屋の松政屋と大阪料理の評判あるのだ。東京でハ出ようがないと。ツイ此頃

店をつあへとしらいが祝儀に濱焙ともいさく、テーブル
じも他の料理まもまくを濱焙をつくりもある。濱焙
と同式のチロリまも用ひてみる。コンナ塩梅と樽徹
してみると特徴がそこへ、料理に鉢組変つた家
がそれぞれ寄り濱焙かまとる。而して刺身も
生雲丹も味醂物(赤ロシ)ウナ一向濱焙と異なる
かなく酒もロジ梅の家もある。結局鯛の利いた
主婦がそこそこいだけもの鉢ぜんい方つてみる。茶
濱焙ところのものを吟つてみると、鯛の皮を酒
紀しれると鯨のからし合をもつてそこと。鯛の皮
の味をつけたものは寄せ東京
だい鯛の皮をもつを教ふ。寄せ東仕事

橋本劇

あがいえをもあけを材料とするまを上方の料理法
濱かあると思ふのと。
北の狭い偏に産れ母と妻を伴のと不町の妻人かみの
北。所謂るどこかの若旦那ともこそべき、鯛る産
味ある男で志きまと料理をもつてある美
と流を交へつてあるもの芋いてみると、北の若
旦那の新川あたりの酒屋の若主人とそくて
志きまと自分の主人とそくて
みる。美酒の銘の酒を宣傳して
もらへまたい主人、歯牙もかけるに板みで
往々江戸見を罵倒することき浜酒もも
るのに、美を皮肉をいはんとみるものもいはず

よい気もちになって、自分の酒を云々したのは、房さ可愛さ、ハ日行の娘も貴君をつかまえ、自分ハ外へ出てから酒を宣伝ますやうな奴が、酒場へ入って酒の一杯も飲めぬ者いらぬ、何で酒がおごるものか、酒場の主人に叱られるぞと一笑を附した。

○今朝、家園の最寄の松の上部にどこともなく一群の蜜蜂が簇集し、或ハ二三の枝を周繞し、光物するのを見れば、多数の蜂が簇集し、為す所ハ何ぞ離れんとする姿の如し。どうすることかと見れば、一塊を形くって、松の枝へ垂れし、其の可なり大きさなる蜂

榛原製

蜂集体であることハ勿論である。その集団を繞って個々に光物する。此の団体を見ること、隣家の二階へ上る若者共ハ、未だ嘗て、集団を衛いて地上に落ちたる事なしとて、是を見ると、蜂の又の同じ松の枝ハ前と同じく、蜂の群集して、角ばった塊のことき、ものを出した。今ハ前ならぬ形の枝出つて、円錐形状で、径二七寸、堅八九寸ばかりの附着して、隙なくびっしりとみる。前の時、すべて、部分的のそれ、ひとりきん

此上に墜ちたかいそんこそこそこんを書く時も世界らし理めば完全にぶらぶらでつてみる。此年であるか、同じことがあつて自分を驚かせたことがあるが、その際は揺のある故至しまれくふ何人かいつのまるか主的あるとからちゃけが蜜蜂の持主があるのでこの時故田はつてやつと自分の家に来んにつとと安へた。そもそも蜂の飼育を技じて保養し出うみたものの知れんるべ何人でも蜂の国独力は恐ろしいものだ、笑と同時に技芸の驚動も蜂起」とこの字充がくいである。自分の蜂へ赤化連れ何等かを教くさやうに思ふが、自分のしどきに赤化を表はすべきものは何人の因縁があつて二

横原製

人にも来る技まるのであるが、我々に彼等は何と云ふことをするか、且くこれをうつしを此しに(五月七日)

○近来日露戦争は明るい戦術が行はれ出してゐる、伯爵叔齊を倣つてのハンガリーは露の西洋でも やるが、これも二三分行はれたし、烟突れ登つて罷業者の士気を技舞することは既に三回ある。

道にあるが、これへ全く日本の二度である。何人道問題で、真是に敬て出来ず、その事の続く間は、敵で表あるの元仏であるので、統内義務が主入つて、要塞をつけることとなる。罷業者はこれを日為る雑いことを敢てするのである。義務の補修まるかに見えるが、実の意思は業者

の無理を武断的に傍主に強要しても効きそうのものであつて、まつと誠心の出来るまで人道問題と解しても、卑怯の戦術であるからまた、彼等をして極力まもやらせて、干渉をしないと方がてつとい習慣を助長しないと為めに必要である。進めて口情を察せないとそうでないこんなる馬鹿らしい戦術を行ふことのもてつてるでありう。浄瑠璃を実験の無い人は、芝居のしとき戦術をそれぬ気の毒の感するけれども彼等の技倫手段と着眼すんだ何も気の毒からんと思はぬ、一応弟子論と共つてそうけんかをの間の消息のそうのも無理はない。

榛原蔵

の偶と千代の句集を読むと、女性の句は優しい言葉が特徴がある、左に数句を挙げる

花まびは出揃ふも待ちも芝菓子人日
梅咲や何が降りても春のなる
梅うゝやう尋ぬるそのの枝さく
まつやまの笑ひも空に消ゆ
寺梅は何を記して枝もも静うゝ
柳眉やおのが草夢かと笑く
春うゝは路笑ふかも柳の雪
初雪の柳絮に雪見もけり
去るは消ゆるゝ浮世や朱の雪
初丁や山く配の空に迷ふず

初戸やたべて少し柿いとと
白月や何をかもむ富士の嶺
まゝしさや手の届かぬ柿の影
枝振の花咲ときポント言そうな
柿見り人や少せうれるまむ
おもしろい雲のえふ飛ばす
○柿の変句一二を掲ぐ
腸に秋のしみとる甚柿哉　支考
柿ばかりの時めく柿の枯うな　夢大
御石柿に秋まん奥の栗山子　孔雀
遠いしみを秋のとこする甚柿　孔雀
柿の木ぢあいと美くるみ信孔　一茶

標原制

流いとこ母か嗚ひけり山の柿　同上
しぶ柿にそまる若行く鴉哉　二柳
○いろ〳〵の和歌俳句の柿
一人とハぬ夜の庵の夜の月とのすゝ浮うの影の
音ぞする　法然
一山里ハ柿の葉のみきいるんと風吹る日ハ
さみしのりけり　茂月
一雲の都を出ひんや柿ハ紅ばやと思ふの
柿咲にけりの上
一柔遠み都無きい落美くさ　抱一
一遠山に赤き書ちる冬木立　同上

一山里の汁の中まで月ぞ一茶

一二村に住居一軒冬木立　義村

一こがらしや行る世渡る家戸新　田上

一心とは何石ささはぬ　大徳

（もろもろ）

一このまくれ冬こもりして待ぬ　義美

地蔵山麓の一庵　山家義美　田上

一とふ人の道さくるつみし雪も深

き隠れかの寺　大徳

一待もとも我へ帰りし庵の面のもみぢ

秋のかなしみ　田上

○前田川冷の句に老が心を得たりと

枯れもてゆく芦の面きく俤ぞ

尾花枯れもてゆく二ツ助三郎

おくくとものいふさまの淋しさ

あ踏んで石踏んで踏んで踏んで夏草

白鷺や掃くうつる江戸の秋

虫冬々人冬々夜冬々の感　諸大義

何ふるこの秋の数　諸大義

咲くや莫迦の戸口に挟まれて

俊影の敗荷を磨ぎ日　田

ゆくゆくと馬に合まれて秋の陰

山雨来るべく軒に桐の葉くれ

○又いろ〳〵今の仲をみだれ吉きく

一 山ざとの心の注家かな　世を遁んこしかひもなきうきうき

一 雲を枕　波を言葉にはるんけんぐるえらとんの

日次あやはある

一 けがんとるあくとれおのる　義とも思えるとえ

月へすみのる

一 ふし絵のかるとこるとこしまとはんを思ひとかんの

世の中のうさ　以上蓋庵

一 紫の庵ときくへ嬉しき　名をんも世をこのもしき

住いるりのり　雨の雪

一 懸けをえんべ風あり庭の雪　草太

一 接るや夏風もの原のおとし　稚宇武

一 はてはみち前の景や秋の風　鶏前の作る

表紙

一 何をかえりて世の中と　ちるや雪の

白く暮るもむ　作る蓋庵

一 何をもあるとるる世の中れかいらぬ

うるの秋の庭の月　以上

一 めくばの風かとて見る世のるれ　うら

やまくもすめる月　以上

一 世風もちらるる　雲のことやめの思ひ

こもるる思ひるるけりまま　幸文

一 まどいすの滅の道へむらばのし　おろかるるこを

地しう自りけん　以上

一 くかるるすまるこるを思ひ　ハ為のの

まちひるるりの　以上

一 数々のうき人おのぶたてくい、我の身のかろ
ぶあはれ　うき世いろ　はつ上

一 萬枯て我宿殿る海ふ兎毒

一 冬ハまゝ夏かまし　ちやと云ひいけりの上

一 雪搗や我門きりの人こゝろ　紀基

一 かくばかり悪しきことのおもふ中の離れて
おらべかりけり　巣播

一 咲一人我をゝく知る人しあくば、千々のそし
りハつちくんぞめし　言首

一 梦の世と梦又しもあの梦ゝ、梦又ぬちめ
と梦とこそ　ぬん　良宣

一 夢も木も鹿さし秋の雲消て寂き芸を

榛原制

梅の月出る、梅の木の枝の長さ

一 梅いのづくゝ、まゝの白ひうの高枝

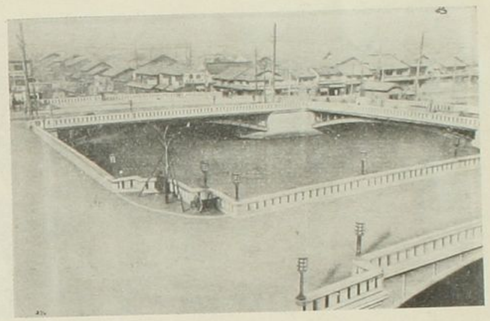
一 武士の矢はいくゝ、蟹の羽のまるたてさく
ちけくをきける有り

一 人ハ武士花小粒ひも虚がらし　一茶

一 又咲ふとも思ハ花め枝見うる　千代

○近刊の新版「上方」ハ大阪の橋を載て多くの
池を分ある、自分が橋しを載て漫筆を書いたもの
一度ひらあつたから、ちうかし早く北等の紀ゝ小北
旅の地を出たく、少しハ取りへんゝ、あつ紙
あらうれと思つた。自分が橋の工ぴりゝ、ゝ文
り入れた浪華の四ツ橋の新田の比較図が出

橋の變遷（二）

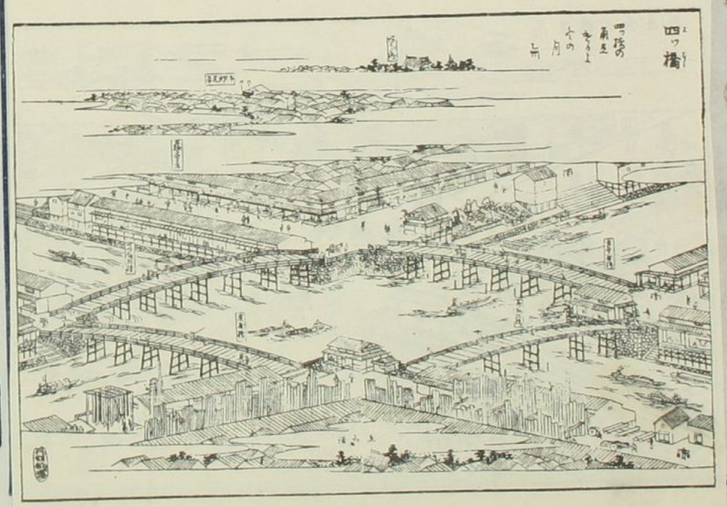


（江戸時代と昭和時代の四ツ橋）

四ツ橋

涼しさに四ツ橋
四つ渡りけり

來山の句に詠まれて
みる通り、四ツ橋は夏
の夜の涼み臺として昔
は絶好の場所でした、
今は電車が軌りネオン
燈が眩しく映ゆる川面
には涼味を呼びません
然し四つ橋の構成美は
他國に見られない特長
で、水の都の誇りとせ
ねばなりません。



榛原製

てみる。北橋の世界を弱うする例のうへ、あるである

物は自分の浸潤中に浪漫の文人を大ふをきしめ
橋を比較して世界の長短を番付の位置にと
とを書いたが、その番付は學者家達の
つとのが今日は無くなつたが、面白く書き得
るとのが北の新橋（嘉永六年版の浪
華風流月旦評名橋「長短相」が宮を主に天
つて出てゐる。多分自分の花柳のもとひあ
つたと思ふから北番付に就て駁論する方面の文
人も故障が出て、折本のまゝに駁論が
出た。その自分の花柳の論議の末、或る社長の力を藉り絵板木を
毀つたのであるが、何も先ず北新橋の

嘉永六新板

浪華風流月旦評名橋長短録

行司　京　並河寒泉橋
　　中井桐園橋

後覽　藤澤畩　勸進元

草荷　難波橋　差添人

世話人

頭取

東友堂藏板

ことを言ひなしたるなり

第一文人の自家宣傳の為めいろくの印刷物を作りて貴人を招ぎ紙人を賜はれり。是れ如何なる行為なるや。紙幣を生じ紙幣の有無が出てくるいつぞや是等のことを書き集めて書籍に曝せし

ことがある。橋の長短は嘗て記載せし芸妓の骨董品に入てある

いかに硬き筆にも文の余香既刊の跡

筆を収めてある芸妓

東京製

○雑誌「上方」の中に京の舞踊のことが書かれてゐる。
瑞穂屋井山春子の名を聞いた時、春子は本年九十五
歳だといふのに、まだ盛んに稽古として京の一千の舞妓
を扇子一本で指導してゐるといふ。
自分の大恩人と絶体絶命の場を四五回も又此、その頃
此春子は、北人の[illegible]
八十分七十四年迄ならば、でありたいものが出てゐるとは
しかしまだ舞の稽古から出てゐるとは、
男子的で充分な能を見てゐるかに思はしめた。
坐敷迄長唄が使ふ錦つれ、まだ大丸下村の家
る北人を招いた時、ちょい恩人の間を北人の坐して
みるのを見たが、瑞穂屋の態度に感心した。

標原制

或る人が汽車中れ北人の居眠る態を見ると京
で湯つたのを聞くと、瑞穂屋として身動きせずに
形の如く扇で顔を掩ふて、静かに眠つてゐる
[illegible]流石[illegible]さまの家だから坐敷にして三味線入
つてゐるかの如くであつたと云ふが、よく〳〵鍛ひ
上げたものである。北人も素性は大阪の住吉の
社家の出で、京に住んでゐる頃はまだ幼少であ
つたが、二代目の井上八千代の超絶さを其の
養母として、終に其をつぎ三代目八千
代となるべきものである。全体北の井上流といふ
初代は千代は京の言家井上甚の書であつて
んが義絶と絶倫の人があつたので時々仏間流

おるものさえなければ上品本位で三味線のみきの楽
器を藤ぶ、御本とあるとおいしい舞であったことが想
像される、仙四郎御本のみならず近衛家の物も此
の藝を長び、名古屋家が命じ定役まで許さ
れた関係上、井上流の扇は近衛家の役があ
るので保存されたもの。明治以後井上流はもとく絶が、
つれてあるのは、春子の勧世の純朱家、片山九郎
右衛門と嫁し此関係から、春子に工夫が生じていま
す一機軸を出すまでの此の井上流は巷を隆
盛とさせて、競爭者が出た他流の名人篠塚文
三の影響を受いしもあるものの此のである。
世態が衰微すると藝も純性を失ひ江戸の

樣京製

花柳や藝妓などの踊りの風をとかく味まるまの出
来るのが却つて俗と受けるが、井上流はどこ
までも斯の不純を排斥し、異端者まで許しこの扇を
元り戻す制度もあつて、そのくやうまでいとのな
春子の藝なる性格が出たものであらう。
舞扇は藝の為に困つてさまくなんてあるが、三
段十五六段もある、九段まで一人前で、十一段から
十六段までは奥儀を極めたものとして名取の義
扇を許すことをうつてあるところが、段まで扇
の色も模様もあることは勿論である。
自分の舞まで越味をあるものが表てに見
ると井上流の為に可なり浸つたことも

云く得る事に行けば、いろ〳〵の風俗に成る。北の海
の魚を見るが為めに、女の姿
い北海流に属したるものなれば、花の時から飽の
くまで見せられたるなり。京阿弥の流れ浸つた
感化もあるか知れぬが、美学や花柳界の
軟弱なる節奏のある典型
的の姿の方が心地がよいと思ふて片
山春の高恩と云ふ人もある松本氏と云ふ
娘をもつることも久しいことで三十数年前と
見たところの美しさ、頭髪がちゝれ
ちゝれ美顔の形容、高田氏と京
都と違へば、高田が北めをえりあてる餘

榛原製

りの一つとして師匠弟子相脱して余が床
に近寄し相談前を何度ともなく踏み出
したのだ、あとは色もなく自分の酒の肴にして
出来た心地なれど北海道の肴を飲む
ことも多いが、只だ後程なれば高田氏と大
隈老侯と酒を酌む人に相違えた時なれば只
だ者なる此用意なしとの知れが、捨て置き高田
氏は日合の思ひ出かあるとて、数分の時
泥酔中自分の下駄を探してくれる者め
足袋はだしにて樣下を降りて来るが番めの
乗を渡すとて見せたるもあつた。今いまこの
く片山門下で降ることである。

○海老華山の墨書に蓮の東湖の題跋ある
拓本を手に入る。東湖と華山の交誼
此の跋文を読つも知らる、今其全文を抄す
余友金子猛卿嘗師事海老華山翁
其墨画数枚、余跋其後、墨者朱生
江戸典華山和歌於之原者所許華
田原藩大夫為人眉目清秀容貌潤澤為
而志者根於天性慨然有憂国之志信一時
之名士也亡歳華山罪元亟之失遂殺
其身余亦被罪被禁錮者七年於茲
而書所既病没矣今觀此書不覺潸然
涙下浪忍起其由以與後世華山風義冊

複原製

ものは故人或目之以書家者流渺如華山者
也

嘉永庚戌之夏西戸蕉田麗渡

○此月軍門ちと酒を嗜むもの、如き酒狂を
呑い此期ハ前後飲さ、何とも辟心地
であるこンナ時ハ心地ハ手紙い酒氣も帯
びてゐる。昔日迄ハ極かセて不義を除し
やれ、昔しの人が如めて酒精の栓を抜く時の
心持の刀を抜いた時の心地と云ふものと同じ
出し、一杯を試める時い刀を二三寸抜いて、刀も
おさまると同じやうに、味覚が緊張の極に達す

る酒の良否を判するには全く前者を試みる時なるからで酒の及ぼす酒の良否は言ひ難いが、要は純の一字に在る。醸造者の誇りも酒類の美味もそこに在るのだが、無論原料には物を混じて醪を破るを習とする。凡そ酒を就てその罪重いこと大なること論ずるまでもなく、道に世の人と物を貶さるは無論で免かれまじと酒類と菓子とを貶る事あり、酒類と菓子とは何のまんの如く作れど悪まるべき家庭にあるべき所謂る将を射んとするには先づ馬を射よの古諺に倣ひつゝ、百樹の法を、酒類と酒を貶ること

原製

を直ちに将を射るとしのぎ、自分は全く射落さんとするに誤謬を弄して古箒を認めず窓のすゝ、賜者は余の書箒を称とすると云ふのみ特に酔集の嘗評を共まして認め無ふ。

○先後の批評として芝葉を傳ふるに品骨堂の数は漸く千点に達したるが、追々採集品物を吟味するにそうく手を入るゝ者多く採集しんの僅かに六十点位である。一ヶ月僅かに十点といふ少数である、格別優の方に譯なるが、余が海到棚の列品として会格するものが容易に見あらざいに二三日数来中に漸くゆるく瀬戸の振出しが

小品であるので作ちらへから筑中のものうしたが。小品を入れる
容器にはお面白味がある。此度木地角形
で蓋の表に時代のあるものがあつて、同じ形の基もの
を下にあるので、目貫を納めて置くと丁度嵌まる。紙
箱に可なり筑中の浮世絵があるが、支那の爵を彫り出
したものが見つかつて嬉しかつた。外国人向とも作
えば胡椒入のいろくの形がある。提灯下駄靴
ちいい既に筑中にあるから（花燈）燈籠に葵章を附
したものが矢張り胡椒入であつて、これも嬉しい。牙
彫の栗、沈香の赤い実に共に根付があるから特
心で真に面白いから、えんも筑中のものとして、外れ落
度焼の獅子の書鎮、金沢文庫で有りし此金沢鎮

時のお徳さがある。小型を載せる平年が入用である
ので、此度櫃に用意した銀線を荷入れしたが
特製にしてあるので、えんを手に入れた。此今入手のもの
一面に振へるへが、倚意の者の書きつけあり（六月十二日）
○初代廣重の筆に係る大日本名所図会といふを得た。錦
絵もどきの五枚、後彩色入の地図である。各地著名の
風景を描めてあるので、書いてある、山川城市、寺院、社寺、
湖沼瀑布（森林）などが書かれてある。（紅葉）紅葉を見てある
が立体的に書かれてある。筆者の表題がある。江戸絵所
六下目金鈴堂 清七板とあり東都表町 玉祥閣書
とあり東都の下に前廣重の三字のあるのは、あとから
ら補足したらしい。多分の流に入つたからの原物

であらう。題名は名所を詠じたものが多く細刻
されてある。
○六月十二日両中数葉本四冊代金の書店を訪ふて
二三の古書を購ふ。

一 西島記　三冊
北斗隠士珍らし、寛文年間松令
開版なる七雅の序あり、北黄侯酒
戦指掌、北書巷尾二年序を
飲き後ち「月夜の四家あり、あ
と指らし思へば、いつぞや北方坊
河に出る時百回と見んず、これハ

樣原製

五十円也

一 杜詩偶評　三冊
官版なる江木鰐水の書入本なり
往々載宋の家を見る、即ち鰐水
の名なり、山陽晩年の門生、巷
もと垂堂隠士の不義と云へ、

一 漢の秘書　一冊
黄安版なる勧世流の秘書と巷尾
なる左の指摘あり
此方面玉武田大膳大夫殿之一人お侍

なるものは是あるまじくと覩世家
の秘密を言也
慶應五年壬辰年九月吉日
花屋素兵衛謹刻

一 戊辰新刻書目便覧
明治七年四月東京書籍機業者諸
堂の会梓に係る新刊書目の分類目
録也約二千種の書名及び各種に價
を附す、内務省に刊行の図書を知ら
んとすれば之を繰也、巻尾東京府管
下の書籍刊行者姓名録八枚を附す乃

横原製

ち百六十録許の書籍の名目あり其内
三三四二冊目福沢氏諭吉の著を見る
無し、此時に法政閣はまだ此目録に
整頓なく各部類の内英語に関する図
書殊に多きに目がつく

○未曾有の世界大戦が収まりて未来の平和を維持する為
めに国際聯盟が形造られ既に十年を経てあるの宣言
家に苦しかち列国の上に立つ政府が要るべき説いたこ
ともあるが要するに実際に於ては決して列国政府の上に立権
がなくて国際聯盟とても決して列国政府の上に立権
を有してあるものにあらず。唯と平和維持するの中心が

国際信義上その違背を計さるいと云ふまでのことであるから、考へやうに依つては吉と凶とを問はず、聯盟を利用して我国を陥れんとする自国に不利であれば我国を脱却出来もし、制裁と云ふても強力のあるものでもなく、経済的に一面重きを置くものもあるが、事実いどうかと云ふと、そう軽人する譯にもゆかぬ。或る政治家は聯盟を評して、亂れた五彩の糸を結ぶと云つて、織り出して各色の絵を辨ずるやうなものだと云つてゐる。なるほど此評の如きことであり、いつも平和の破れるのは、多くの国情が知れないから、偉大の感情や猜疑の起ることが多い。聯盟でも世界のあらゆる国が共同するに於ては、種々の合合の結果をえんくの

横原製

国の事情が異り利害も多くあるから相違ないが、五ひに国情が異り利害も同じくないから、種々の提案に一致の出来ないことは、相違ないが、いろいろと評議を重ねんば妥協も成り立つてくる。我国際手は何時でも言れそうなることであるが、どうも行き届かぬのは、我国の体理が無人であるから。国際問題おのづから輿論が盛んなる、聯盟は既に十年となるが何ともんな切実をもつかと疑つてゐるが、聯盟を中心として云へば、国際問題の種々の行き詰りは、聯盟の調停を待つて戦争となるべきことも数回あるが、まだ嘗て聯盟の調停を待つて戦争となるべきことは、此の時でも切なるものと云へば、後ろ盾とも云へる

ある。聯盟という強国が柄を振つてゐて、その最も重要の
委員い国が強国から出て長く日本は其これに加はつてゐる。
北の重要の委員会に列国を於て決して軽りさしく思つてい
長らく、多くの場合、各国の首相が自分ら出馬して
ゐるの決定権は本来は政府の命令に依るその全権を於け
る、北等全権の一員一行は駐る事く他日の左券とする
ことを不可譲れるべき。平時に於て列国会議に平和の為
毎年開かれることに何人と雖も異議を唱へ得ざるべし。聯盟で
う成り立てから十年経つたといふ、世界的に決して
長いとは云はれぬ、此間に著しい偉績を挙げたる無理の
沙汰である、四五の強国間に軍縮会議が開かれ協定
の成つたのは聯盟と離れてやつたことであるが、聯盟で

榛原製

の平和の規定が不完全であるとの説は多い。兎も角
各国が平和の為めに軍備の縮少を皆もするようにな
しめたことは聯盟の功を帰さねばならぬ。聯盟でも各国が本気でやつても長い歴史を疏通するに
は誤解を除くべきは勿論、お手国の無理を制する必要
でも仲介とも云はねばならぬ。各国が互ひに無益として無駄
の費を切り無駄の資を散ずることは国の富を一段の
出来ることは申分なしとせんを嘱めることも聯盟の使
用ひである。軍縮会議も第一例であらねばならぬ。来年
四月頃に行はるる軍事上の申合せは極めて注目すべ
きものである。中には容易に別個の問題を見出し
得るやうな簡単なものもあるが、不安妥協を試み、或件

ひも或る程度まで成り立てば、そこに新しく教果があるのなれば、日本の如く四隅四方を伝えるものあり、油断なく脳力の運用を注意を怠らざるべし。

○北日本神田氏の二三書庫を訪ひて二三の史を得ん中井秋蔵の自著

一 奠陰集略　一冊

作山名獣の作を収む墨附十九枚

樹心と懐徳堂の三字を刻す、家口義

〃作山自著の遠世山詩文一巻あり

見て保ちも玩味すべし

一 論画詩　西徐　二冊

北書春琴の画論詩なり、巨比稀叟の序

標京製

なり、西徐は小林蕉山の序あり

又牧軌の跋あり、後蕉園の跋あり、

跋あり、西蕉園は海屋の評語あり

り、賞すべきは山本玄瑞慈雨楼陰の

評語あり、注は小西松隔の他の作なり詩

八前後六十絶、概ね画のコトヲ述ベ

る、常に所見也　也　今なほ、惜入るも石此

六月十三日記

○北休まの書一から二種北方的の俳句が行はれ、デニハ、と

云ふ名が附いてあるも、七とハ麦木余乙由ら記りなり、面

八千代しかきこのと題材とする一流を開きさ芙が伊勢流
と云いんれが、其の流儀が土佐に移りて、遂に「テニハ」が把
つれのである。此句は江戸の川柳に似てゐるが、異なるの
は句の文字数の初五が初七となりもする。此の事も
句調と全くゐつて聽のる響きが、特に土佐方言
の緊張的な表現とピッタリ と合ひすぎ
まるのである。感じを出すのである。此者の作者の作品
儒者の酔狂
きうし（孟子）わけなる 思論語を土きおる
雑有思惑
本山で白もらふちよる 神小人
鶴の空巣

追記ゆえてコキヤコナといひよる
山
言いのうーとでふらも賞めやる
鍬棒引
北の狂庵も寝ずれ居てごばんしよ
冠句 古句
馬
乗で吸人に泥のかけ飲み
結句家康
逃げるを是とする大将の一の手
謀る
殷〻言ひ込む苦るを逃れ城が危い

新酒　芋信

股をくゝり腹を立てぬかんしん

旅

一杯の蕎と石を頼る椎茸

日

蕎着て出ても空腹なり　灘酒

のびる

雨の折んで拳あがる早蕨

生類

廊の狸の兄弟へし神も

呼ぶ

孟子孟子と孔子ばく旅鶯

標原樂

秋

秋は目くらの耳とろろ目とろろ

知人桐島保一氏依生身である所から土佐句テニハ集を著はす、新渡角の異を完成

北書は四五の掉俗がありて土佐の俗語が多くある

ゝ、

珊瑚採り

御月板桃色、誰がいふ。海女がいふ、海女の口

別歌は

童謡を托して珊瑚採りの圓禁ることをれのめめしてみる

木やり

五葉山やまの北裏で絶滅（なくなる）う来ぢよ、
うんとやんく
絶海の地名を俺等の義と通ハセて感
じてゐる
出美
高麗別南実盛稲の忠はひしやげハ
ひしやげるい土佐の方言で押し砕くの意
（也）

○都下の大学ハ官設の三大学の外に私設の大学ハ十七
ハを数くるゐどのも数が多く、世界のどんな豪華な都

樣原製

市まで也コンナに多数の大学のある所ハない。数かく云
へ心得るべきでもあらうが、其の質ハ表面ハ弱
で恥かしいやうなものもあるが、別庭ハ
他の整理やるべきものもあらう。然る経済の上ハ
ら進る為続の出来ないものが出てくるとおもふ。日
本大学などいふものハ外面かく見ると、紀元二千五百年
の記念の科があつても、なかなか教育ハ
るかの、内実調べてみると、皆る者級を使つてゐるの
者既都市として若干の官費ハ金を取つてゐる、其が
金をこえるのが目的で、実の本来の関係などいふ
の此の選科医学ハ学問もあるが、こんなことも者級を
借りてゐるのも、実の本来の目的主別の目のものである。と

の学の校が成り立つ事なると、ふるい日本大学の無かり知らないのである。無論教文と何等の関係がない。どんな学の校でも其外金を出すことあるが日本大学の看板を使すと云ふ利つてい澄安心あしい。然るに地第の不景気なれば、看板借り賃も其外金が掛い為なれば、本体が潰れかいつてゐると少くかいも学の校の数すくなるものがすくいくらもあるいもあるこう列座して将来また大学の数の多と関すること多くなる。亦多く教師をとること大学の権威の元気を失ふである。

○昨夜の今宵文部省の今朝ある酒宴を為すること多く、お演説の主人一来の偶吉を高くく来る。よくも沖ふま

横原製

部へ出ることを無数に出入る。思くくも未まを賞ふ繁ふ多く、是れ一夕春を賞ふ擬きぐし、偶のめきの論もあり、一刻ることを、偶吉十数人も出、收ちもあんが稲ちもあるは吉の後載の国ることを歌て上来のこのと云ふ繁のことも、宵火後はあるく減ぬて今答ふく手き入り難し。不見稀校書と思くべ先の上書の部数ること、文学の吉に鶴を獲なく執てつくく思ふ、何かある部当家の此学を獲なことを恪るあるとあるが、先菊の吉鶴と共集しいることとて、北鮮の国吉を缺いて完璧と云ふことが出来ることが、性の一八数の関する或ることの国吉あるとしても、極政●を画きて文ることの八北吉ひあるる。吉ふく性典ふと云くべどんな吉拙

新教室新築工事報告

技師　桐山　均一

昨年七月新教室の建築が計畫され今學園内の一偉觀としてこゝに落成を遂げたので其概要を簡單に御報告申上げて置ます。

一、位　置

大學敷地内の南端にして大學としては最も由緒深き場所卽ち東京專門學校時代大講堂と稱し煉瓦造の建物が建ち居りたる場所なり。

大正十二年關東大震災の折此の建物は破損し一方圖書館を建設する爲め取り拂ひ文學部教室を移し昨年工事着手前迄ありたる場所なり。（圖面參照）

二、樣式表現

世界の樣式を基調とし近代精神を以て設計せるものにして、外觀は大體に於て縱の線を表はすことにし周圍との調和を計り色彩に特に注意を拂ひたり。

内部はつとめて簡明清楚に取扱ひ兩翼屋上瓦屋根は校歌

「燁ゆる萱は吾等が母校」

といふ意を表はしたきためなり。

三、構造と大さ

鐵筋コンクリート造五階建一部四階建

間口最長	五九・六五米（三間八分）
奥行最長	三五・五〇米（一九間五分）
高さ最高	二三・五五米
同　軒高	一六・八五米
總床面積	四四六〇・二二平方米（一三四九坪）
内譯第一階	一〇七三・四〇平方米
第二階	一〇一一・七三平方米
第三階	九九九・七五平方米
第四階	九五九・七五平方米
第五階	四五五・五八平方米

四、工程と人員と單價

起工　昭和五年八月十六日

コンクリート打終り　同年十二月卅日

竣工　昭和六年五月卅日

延人員　一萬六千餘人

坪當り單價　百八圓

五、概　要

其礎　建物北端一米四〇　南端三米八〇掘り下げ玉石地形の上鐵筋コンクリート基礎構成

外部　腰新小松人造石張り上部人造石洗出し背面モルタル刷毛目引仕上とす

屋根　四階建の部分は陸屋根とし五階建の部分は日本型瓦掛瓦葺とす

内部　室内床は一般人造石磨出し教員室、事務室、五階の部分は板張り廊下床周圍人造石磨出し中央アルフアルト　ルタル敷き仕上とす

壁は腰モルタルペンキ塗り上部漆喰塗り仕上特に教室後部壁は吸音材張りとす

天井は廣間を除く外吸音材張りとす

便所床腰共タイル張とす

小使室疊敷とす

窓　外部スチールサッシュ上下欄間付

扉　内部　木製引違

外部　スチールドアー

内部　フラッシュドアー

設備　各教室には造り付グリンボード取付廊下にはドリンキングフアウンテンを設く便所は水洗式淨化槽裝置とす避雷針二基設く電燈配管設備等

本建築を設計するに當りては大體に於て理事者の希望に從ひ一方顧問内藤博士を初めとし建築學科教室諸先生のよき御指導を仰ぎたるものなり。

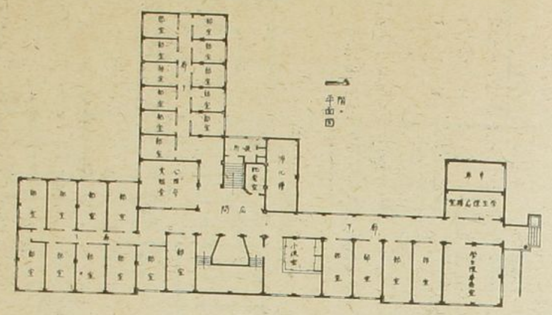
又本工事落成迄自分を援け日夜その努力を惜まず盡された諸君はみな學園にて育れし人にして

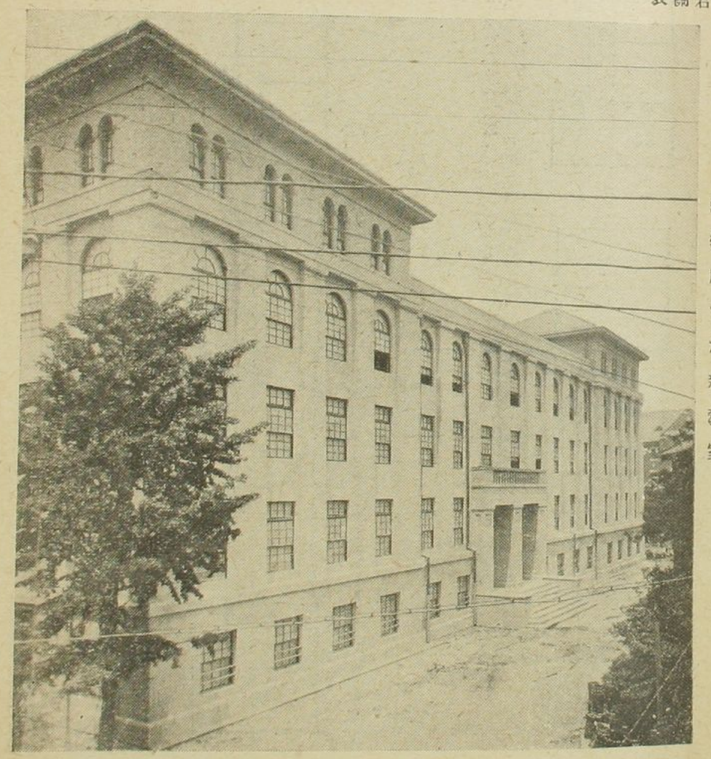
強度計算製圖に　横須治吉君　森　義治君　林　久一君

設計製圖に　平野國夫君、江口義雄君、坂本信十郎君

現場監督は　林　久一君　森　義治君　梶　良平君

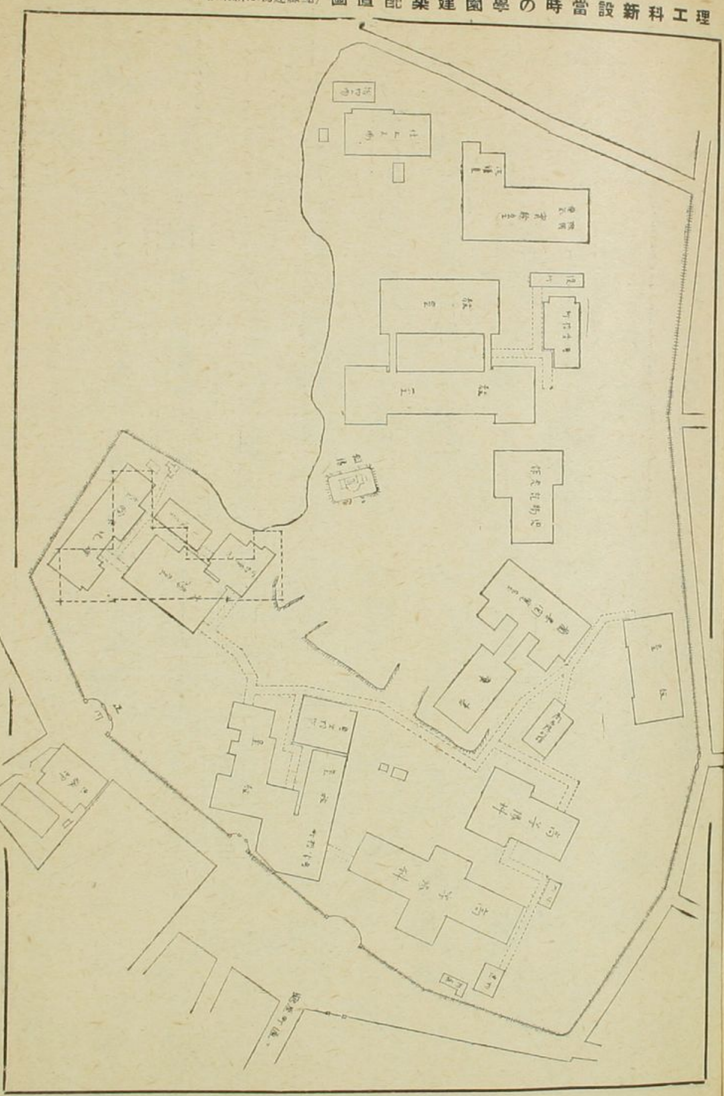
最後に以上の諸君並に請負清水組工事關係者諸君の誠意に對して深く感謝の意を表すものであります。

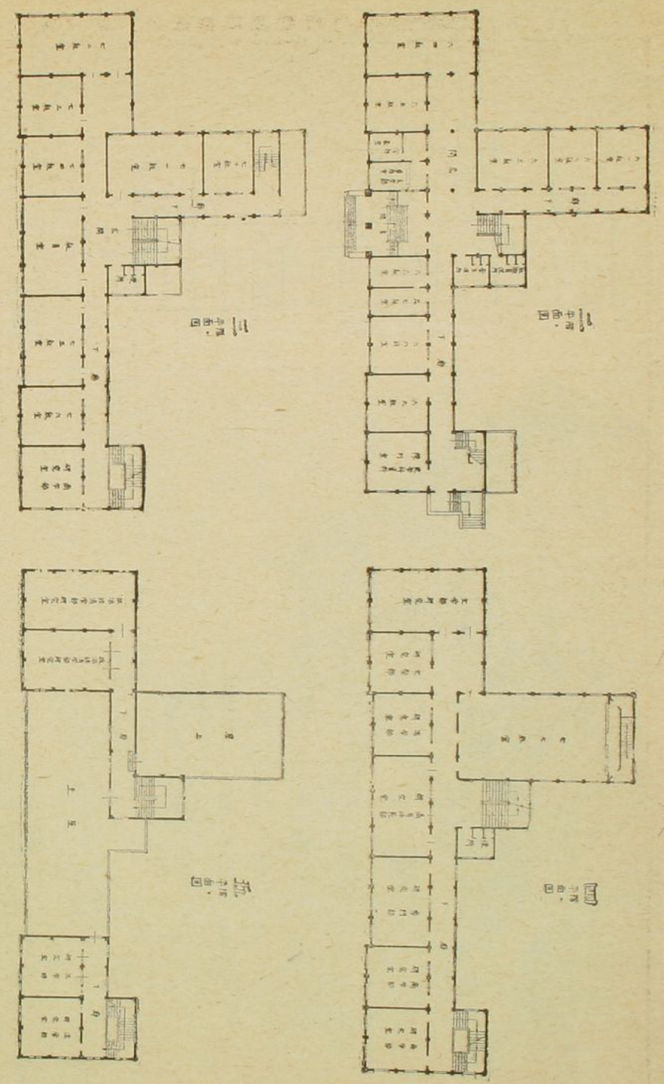




新裝成つた新教室

理工科新設當時の學園建築配置圖 (室教築新は物建線點)



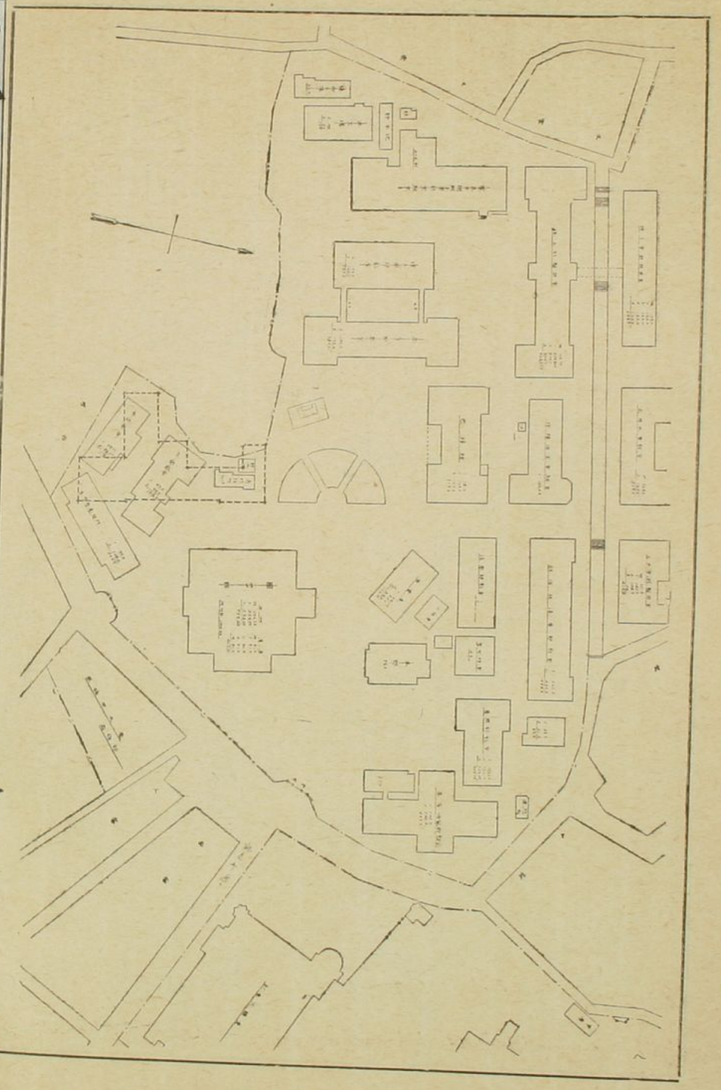


新教室新築工事報告

建の部分は日本型瓦葺とす

内部／室内床は一般人造石磨出し教員

大震災後の學園建築配置圖（點線建物は新築教室）



建の部分は日本型瓦葺とす
内部　室内床は一般人造石磨出し教員

かと問ひ詰めるなら、何人もまこと書畫に巧くなるよりの無い、実に詩人の世のやうな、胡麻化しの世の中である。人間の最も大切なことを行事を画しなければならぬ。何人も秘訣を求めるよりの無へ、いくら凡庸の為めとなるべき禁止を例へば、画家の性根を凝らし其の精神を打込むもこそ立つて人生に如何に有意味の画いふ以上のある事いふことを分からせることを悟るのへ凡庸が許さるへからず、見い強ちるいとんでいふ。偽し凡庸と言ふものが為すべきものへ。凡庸と言ふものあつても之れを私義する者に於て何かあらん世の義書家に頼かいふを知きるに珍重する拘泥、思ひ切つてこの

部数こそ少なく、彼等の部数は、
嘉七人が、四春画プロパーとなると、手を入れることも躊躇
する。彼等の蒐集の不徹底なるの点に関する限り、
何故に百人単数先づ此の部数を蒐集することを躊躇
進めるべきであるか、なぜ不徹底の、
不解なるものを元るに同じ部数をまぶるべき筈
ろ春画をもんべきぞ、性慾
以性典である。卑猥なる、こんこを極度もあらし
更コンウエンションの品きぬ。なぜ浮世絵
い強ちコンナ書籍を得たのも、レヤステアイ
でいる。なぜ、おのずから真理もあるのだ、二月末
りを記す。

標原製

○偶ト何ガ為ニ、の歌麿彼春画紙上絵を歌麿彼の一特徴
ると、歌麿彼春画紙上絵を歌麿彼の一特徴と彼春画美とあると左の如
く云ふてみる。確かに西洋劇と異なる所がそこの
あるやうに思ふんだ

歌麿彼春画紙上絵を歌麿彼の一特徴と彼春画美とあると左の如
いはゆる、女人らしい女人らしい品位、情緒であること
なことである。北斎と関係ある故劇生（岸田）氏が
うまいすきといつた。いや、うまい名称をつけた。
といふのは、えんい苦くる宮廷以来の彼春画を見
慣れてある者の一種の心附くことであるのだが、
んを歌麿彼春画劇の一種の特徴であると標榜した

「役者美」と名を附けた者を聞いたことがない。

と役者美は映画にもあるが、外国劇にもあることと、「役者の表情美」（略す）などは外国劇にも殊に映画にも大変似たことがあるらしい。役者の柄や持味を見ようとすれば、ヒエすりきれるが、歌舞伎の舞台の場が場面の変化が明白なるやうに、「知らさあ言つて少かせやせ」や「月はおぼろ白魚の」も魅惑的だが、他の役者にも明かなる。役者の美があるからだと言ふ表情の事をつつまねばならぬ。だしかに、えんは本来が柄に箱めて書いた作だからと言ふ迄しかない。明石や浦々は役者らしく感ぜらるるのは、

五代目富田三郎の役者だから（富田氏）外国の劇でも、あの人の当て嵌めを書くとあるが、あちらの純な科白劇で、所作式の美を主眼とした作のないから、オセロが疲れたようなハムレットやイヤゴーがでぶ肥りあらうとばかりは、心に訴へて感動させない。クラシツクの劇でもさうだ。ニーチェ中心の近代劇でもつて尚更さうである。役者の姿の美なるは第二義、才三義である。

歌舞伎は見た目の美しさを第一とする劇である。動く書、動く彫像である。有形の音楽である。例へば宮崎春章らの役者絵が其好役

描いたのかさくもあるのひとつで、高は一種の魅力を持つやうなものだ、彼女は、其イデオロギーがめざす浪漫的なものと、其の肉感がめざし意識されるものとの、両者の鑑賞眼のある者とが、快感を覚えるのである。二葉、三葉と見て行く間に、右の一上海俳優が、悉く具備してゐる情感の流れ

浪世絵の役者絵は如何に役者美を描いたものであるか、他の人物の絵も同様に役者美をえがいてゐるから、ここに人をチヤームする所があるのだ。なぜ浪世絵は美しい人物を美化する特殊の芸術があるのか。強き写実を基とするから。だから前にも書いたことく、浪世絵は

樣原製

裸婦画もまたいナツニノみるべきい。あのしまんて衣類をサーでも配する魅惑的のものである。これが浪世絵の特質である。下方役者美をとるべき姿態を選んだり、光と影とをセリフを選んだりシグサを考へること、浪世絵は男女を美化する姿勢や衣類や頭髪などを美化する。浪世絵は[illegible]美しい人の顔を[illegible]切り離して離れるものである。

幹の女を描いたりするやうなことは、何んとしても役者美に取るから、実在しない長吉美いたものを作る作つて比べるから、浪世絵が美の則のものであるから、役者美を離れた浪世絵の美は無いのである。

○スポーツと国際的に名高く世界に広く宣伝び勝敗を通信することが例となるとまた、英国のケンブリッジとアウクスフォルド両大学の競漕と米国のエールとハーバード両大学のフート・ボールとは今日早慶戦の世界のスポートの列に入り、その勝敗は世界を通信せらるるこというまでもなし。

○女性を主人とする外国の文物は女流作家や女優などが多く持ち離されを要、日本にはやつと今日西洋と通信の女流芸術家が出て来たのに過ぎない。駆る間もなくもあるの日本の西洋と優先権を争い得るまでに女流作家の輩出の如きこれを出しても光輝男尊女卑の習風が崩れても動もすればデスレガーにさえ陥ひいあるに、清少納言の最大傑作の随筆に比べて後人を取らぬことのできるまで相い千百弐十年と云う早い時代に、西洋で北欧と武部と区別する程の女流作家があるか、私しは未だ知らない。女優まで出てお国歌舞伎といえば慶長以前で千六百年前に既に出ている。日本の歌舞伎の祖いと言う女優であって、お国歌舞伎の流れを汲む女優が出て後、優れた無つた。北斎と杜そ西洋と優先権を争い得るのである。ほ(ぼ)同時に之のと新たに右の如く画史に云うべき

早く女優の出て来た者を出したと云う歌に拠ると世界の演劇史上から見て、清少納言を取らず

国とといつてよい。支那印度ペルシヤ埃及希臘羅馬などの文物は
滅亡し一旦滅亡してまつたものの如く、然
し殺されこれを復活させたのは、今日女優位置
の文紀の如くに復活されてゐる西洋列国と共
も大体十七世紀の中葉以後に於て、漸次
優を使用はじめてゐるのであつたが、その名も早くも
優が存在してゐたと信ずるフランスにも
見実西暦一五四五年の或記録中に、ヴリー
ファイレーとかいふ一女優の名を留めてゐるの
みといふことである。もつとも演劇の術は「の
著者、カルル、メンテウスの説によると、ギリ

横原制

前に、例のミステリーと称する宗教劇を稀に
は少女輩を男優と併せ用ひた例もあるが、又一
五四七年フランスのヴァーランシヤンスの基督教
雑劇に、五人の少女が男優と共に演じた例があるとこと
とあるが、これを除くと西国では十七世紀
に入つてからが、女優の出現時代であつたら
しい。イギリスの如きは一六五六年の九月に俳優
コールマンの家のエールマンに集といふのが
公の演劇の始まりとして自称するその作品は
芸術普の名工ナントの「イタリー歌劇を模倣
して作つた」或大のべうい出演したのが女優の起
切であつたが、これは佛蘭西文化史の一段

沒落を過ぎさいきんであるが勿論イタリーにも、えんよりもずつと前に、既に女優があつたが、ドイツの如きは英國よりも更に遲く、文久一六八六年ようやく以後、かの俳優のヨハンネスとエルテンが女裝と妹と他の女一人をモリエール氏の芝居に出演せしめたのが始めであつたらう、だから、上文に紀もおいたことく、芝居八年（寛永一六〇三年）を以て既に禁令六年（西暦一六二九年）を禁止された我邦女優の歌舞伎、よりそれが約五十年を經る歌舞伎を過ぎて、女早生れる歌舞伎に於ては、空穴を穿ち、女優を喝へといくらも西洋にも

榛原製

こんと北欧に於て先優を手の國々スペーンがあること

日本では源平時代に白拍子と云ふものがあり、えんも踊りをやつたらう、女優と見ると、古ギリシヤ古ローマ時代に於ては、早產國とでもいふ、神代の昔の名乘りを揚げ得るかも知れぬ。

○右の一節の「新編家の光」の隱岐氏執筆に成れば、七月號の初頭に掲げもある。因し面白味のあるを少しく舌きかへたるものと春城漫筆にも掲げることとなつてゐる、えんとこんとをつきまぜんべ、一優日記がハウキリする

家庭は合作の藝術品

早稲田大學理事 市島春城

新婚「家の夫」七月號掲載

家庭は、鉛々の安全地帶であり、自由鄉であり、また一小國でもある。清白で圓滿で繁榮な家庭は、何ものにも代へがたい優れた藝術品である。しかも、この藝術は、一朝一夕にして成らず、一人二人の力にして成らず、老幼男女相倚つての、たゆみのない努力に成つた合作である。であるから、この藝術をつくることは容易ではない。

○

畫を描くに、合作といふことをやる。一人が山を描き、一人が水を描き、一人が樹を描いて、それで纏まつた一幅を成すのであるが、それが案外難しい。なぜといふに、合作者の意氣がしつくり投合し、手法がぴつたり合はねば畫の全局に破綻が來る。破綻が來たら、もはやその畫にいかによく描かれた部分があらうとも、それは失敗の作である。

畫は、本來一人で描くべきものであるからそれでよいが、家庭を形づくるところの藝術は、どこまでも合作でなければ出來ない。成りたゝない藝術である。共同精神共同動作の要る綜合藝術である。

その大切な共同精神、共同動作……の根になるものは何か？親和である。

○

よく、『水入らずの間はよかつたけれども、他人が入つたので、複雜でむづかしくて困る』など、、養子や嫁を迎へて不平をいふ舅姑がある。それが嵩じて家庭に風波をおこし、もつと切迫して離緣沙汰を生じるやうな不幸を招くことがある。世間には隨分とこの紛爭が多いやうである。

理由はいろ〳〵あらうが、要は双方の不謹愼から來る。ことに舅姑の不謹愼から來る。

もともと家庭の成り立ちは他人同志なのである。まづ舅姑の立場にゐる兩親と雖も、はじめは、恐らく他人同志であつたらう。それが今日、まつたく一つのものに成り切つて、共に憂

ひ、ともに喜び、共に生產し、ともに消費して滿足して居る。

そこに家庭の生命があり、面白味がある。

娘に迎へた婿、息子にとつた嫁、それらの若い人たちも、やがては左樣なるべき後進の人々である。他人であつて最早わが家庭の人となつた以上他人ではないのである。それどころか、將來は、その家庭の主權者となり、主婦となるべき大切な人々である。家庭を重んじ、家庭を愛することの强ければ强いだけ、お互にこゝを深く思はなければならぬ。

愼重な態度で、充分に選んで婚嫁は迎へねばならぬが、迎へた以上は、その人々の育つた家風や、教養や、性格の相違で、こちらの思ひ通りに急に行かぬにしても、年長者の愼みと、いたはる氣分で、氣永に親切に導いて行き、家庭内にはいりきつて、氣持よく歩調を合せ得るやうに仕向けなければならぬ。圓滿な家庭といふのは、要するに歩調の合つた家庭といふことである。

○

家庭を繁榮させるのに一番大切なことは良い子を生み育てるといふことである。しかしながら、夫婦が始終喧嘩をしてゐるやうでは良い子が出來る筈がない。風波の多い家庭に、立派な子供が育つ道理がない。よい子供をまうけるためにも家庭は圓滿でなければならない。子供は實に家庭を安固に支持する重大な支へ棒である。科學者がよく云ふことだが

『物の安定を保つには三點を要する』

一本の棒を地上に立ててもそれは仆れがちである。二本たてて互に相倚らしめると、いくらか安定を得るが、まだ鞏固とはいへない。三本たて、お互に相倚らしむるに於て、はじめて風が吹かうが手で叩かうが滅多に仆れることのない安定を得る。——

これは何人も知つてゐる事實であるが、家庭も同樣である。

夫婦が互ひに相憑り相扶けることは、勿論大切であるが、此上に子供があれば、一層家庭を安固にする。まして、兩親、兄弟、姉妹が相和して家を支へるのであつてみれば、なほ〳〵鞏固な家庭の出來ることはいふまでもないことである。

○

家庭と云ふ藝術品をみるに、尠からず拙作もあれば駄作もある。その中に於てすぐれた傑作をみるのは、みる眼にも愉快であり、その親和は、努力なくしては生れないものであることを知ふ時、心からなる尊敬の念が起らずにはゐないのである。

○蟹の習慣性（ビヅト）を産卵から孵化するまで、卵を産む為に浅瀬に産卵する。

平生は外海を泳ぎ廻るが、卵を産む為に浅瀬に産卵する。

産卵の季節は春の彼岸の頃と陸岸を

匂つて来る。その先頭を立つて来る雄は大きな大きな蟹で、甲羅の大さが五寸乃至七寸もある。雄蟹は、その

後から順々に小さいものが列んで匂つて来るが、約

三尋深十尋位の所に来ると雄は卵を産み出し

そして交尾するのが例となつてゐる。蟹のハビツト

の事であるが、雄蟹は卵を産むと、その卵を脇に抱

いてそれを養育することである。北の海は約一ケ年位で

卵が孵化すると子供がおやれ海へ泳ぎ出す。母蟹も

が沿岸近く匂つて来るのは前年産んだ卵を産

標原製

く餌のない所に孵化されたものと考へられる。

卵が孵化すると雄雌が交尾する。そして外

海へ移動を始める行動ひゐる小さい蟹は陸岸近く

に集つてゐて餌を求めて成長すると育つて行くさ

て小さい蟹が生長すると邪魔になるので甲羅

であつて、それを脱ぎ捨てるのである。甲羅

の小さい蟹は時々脱皮をやり、大きい蟹は年三回

位脱皮を行ひ、脱皮をすると蟹の殻は約

かに分れ、自ら護るように海底の砂を掘つてそこ

に隠れ、ヂツトしてゐます。その内に石灰質の分泌

する物質で新らしい甲羅が出来それが固まる

のを待つて穴から出る。北の脱皮は蟹と大勢

力を要しまんが為めに如何なる度も、度重なる上に餅無くして酒なのだから、金を度重なる。仮令之んを解ることを恒久的と呼んで、遊業家の之んを採ることを恒久的にも貧弱であるからのまま

○早大の校長が更迭まることは云ふまでもないが、いつも其場合その自分が主役者である。今日の場合は校長が辞任とするのか、自分は其の後の校内を代表し、校内を纏めるまとまる面倒の衛を南つてゐるが、実は今日の三回目である。往年校長が辞任の時、高田の学監を天皇と謀らんとした時も自分のみ衛に當つて天皇と数回の交渉をしたが、高田学監が切角積上げた事業を

更に恢弘するの策を用ひず、天皇流儀で清極主義の為へり校内の悪が既設のまゝ縮小せんとする傾向が見えたので、自分は断然高田学監を落さんかと切言し大限度も考へを深くも、天野学監を通ることは沙汰止みとなつたことがある。此の一件は当時極めて秘密の間に終始したから、誰も知らないが、当時自分の著作に、外平内動録といふ仕事言は大略が書かれてある。自分の考を受て一方主ふことをしたのが、先づ第一前金の積立金が天皇の同意しなかつたが、即ち大限度を縮小することも甚だ同意しなかつた。基金募集をしても大なるとなすことも勝手同意しなかつたのだから、之を校前金の者

天皇と共に国を立てんとしたのである。若し無條件で
天皇に任せて置いたら大変なことになる。現に科挙
ず、学校は学術の極に達したのである。前掲の学問を吉田
いくら教育の府でも権力者の意中を察し
から天皇と徳川との両方に仕えたのも、吉田が天皇の意中を察し
て且つ権力を恐れて人としたのである。学問の上の校
長は、あつたが、事実の校長は学監であつたのだ。天皇
は十の九まで此地位を手に入れたに過ぎないのだが、
終に外れたから、それから吉田と絶交する感情は一層強
くなつた。そうすると不平の徒は[illegible]内々心を
天皇に寄せ、天皇をダシに使つて望を達しようとする
ものが生ずるのも自然の勢で、それが第二回吉田が思

橋京製

任をとる時に当つたのである。此時は自分の吉田に代つて衛
者であるが、天皇一党の徒は至尊吉田の下れ
学校行政を無つたことを好機と呼ばはり、デモクラ
シーを高唱し、騒動を演じて一時学校を乗取る
別つた。その暴挙の魁として権中納言が天皇である。
天皇は大隈を信じ、大隈も信じて感論を受け、それを聴
ようとした。大隈も信じ、終に重愚に罹られた。自分は
ハ切る内閣を収めんが為に、先づ中納言と
して、徴兵天皇と諸和を策し、松平牧皇も
授に同じ主つて勅令輔翼する事があつたが、其夜天
皇の説くことが聖勅及びとうして紛争に高は憤
き、続国天皇を放逐することをうして高を結んだ。

北の驛樓と高樓とを兼ねる天樓の天樓を底護し形勢
なり、亦或る豪商の邸資を天樓に進ずれば。北の大驛
動ずい高田の信つめんことを恐れて高商らも退かし
め、彼先びある負人の陣頭に立つて事を處理する
の間に十分の安心を与へたるは其為めとして
用ひあるに十日ばかり滞留日学校の拾収を自分が宅に命じて
自分がそれをリードしたのも北の驛樓の時と同じく委
細の校紛録」を書いてあるからここに詳悉せず。
此度のは此年北の校の拾収は野球切符
布に奉連して赤い手や右側派を分かれ絡んだ絡
樓び時恰も公演こと出法しもみれば絡が馬関を
着すると右側派の人を遠く流れ、車中絡一行を

監視することもなく越後に発し、中央ステーションを
着すると多数の出迎人と撃して絡を絡迫せんとし
ばるる行事つて一木宮相を絡を見誤りなる珍らしき
を多く、引つき絡を学ぶこと先ず第一の石癖
を増長しること甚だ大なるものあつて、此方は毎日不眠状
態にて疲れ音態なるも此度は外部からえて今日西
なるので、或は特別なものもあるまじきあらず自分のおきい見田
が辞任の場合にはの光を留め後をつとめ来りなれど全
方は行くまでもなく絡と成ることが出来ず自分も疲れて
絡をのこして先一賛成しなくなる自分也、此方は絡を代
現して二の校の各五番と辞令を渡し、是れ日田の
を達せるべく努力中にて一番の前程拾数人の者を三十

樓原製

名はかりに、まゝ待を懇決し、一日と金曜でしたるに七八時
間を費しけるに、
此の会議の席で容易に服しえざりしあの校友自身の為
手の紙相手にあらざれば、役等に云く伝ちの為熱心に
もを得ざるとしても、恐らく重要に裏あらん此場合に初根
を絶つ必要ありと云ふの、大隈を指すのであつた。彼
等が伝ちに曰ふを待つまでもなく、世間に大隈に反感のある
のは事実であるし、此年以来伝ちを抱ける国民党
は森脇で自分が右傾なと前に云ふたのに、まんじあるが
その森は何んといふても大隈と相通することの
は何人も疑ふことが出来ない。前に天皇(陛下)から赤大
隈に、他人に利用されて動くなと仰せられたる武

複原製

士の大隈に先だつて高田辞職を以て、荒し辞
任と決した。金曜校友の曰く伝ちは命令として高田に集
まれ、まんが乃ち有名なる不利益と云ふ所、俗に
い狼狽を此め、自身高田を訪問することまで
騒ぎ出したが、これも外面を糊塗するよの、本心は
いことはなりかつてゐるが、大隈をして行動に干渉せし
めるやうなことはしまい。恐んを抱くてゐる際に説くが
よかもかんと思ふ。
高田伝ち辞任の後、後任伝ちを挙ることが大切問題
であるけれども、まんは従来伝ちに代つて大隈を説く事行動
を面現して四中積積を養ることが乃伝は無
い。従来は右傾なる者であつたが、へうこは恐くまで主で得

るいとあらう。但し高田の後を継ぐことは田中に
とつては難問である。田中は自分が其を
接ぐならばやりもするが左も無ければ迷もやめぬと云ふの
大隈の我儘を顧慮するからである。其に就ても此後
育英維持費を如何にして捻出するかに苦心した。
田中の言を聞いて、帰宅の途に就くと
あの人自分は極力説いて把持しめんと云ふた。
維持費をひらく前日（二十二日）学校会議室に於て
教職員主事四十名を集めて余から高田後任に代り辞
任届を提出し病状を詳述す、聽者の一人幹事
は、此後の余の説話を押し聲涙共に下るの概があ

翌日の維持費のことも余が後任に代り同一の事を繰り
返し説明承認することとなつたが大隈や山田其外
郎は一切留任を勧めるのは儀礼であるとは言ひ乍
しかも斯る煩雑を要する為め迂闊なことは
面倒が起らぬとも云へぬのだ、それを避けるとなれば
赤面に苦心した。留任を勧めるの誠意を疑ふ者
があることを言ひ出すのは一笑に値するも是は余
のあらかじめ察しかねることとなりし。田中を後任
に推すことも附て大隈は別に余を延き且つ
後任を豊かず、時機をとつても遅延したとうかうと
云ふ形跡もあつたが一挙に決せざるは却つて後更
を来すの恐れあるとの余は在任せず、一面田

中に説き北の境界躊躇を許さず理事会に互選の結果後藤伯を推薦さんとなるに至る議すべしと折会也前一維持員会より席上伯を主任とすることあらば一戦を試むと唱う待ち構ひるるがさるこというまく、鉄木実彦を投票と称り理事の補欠に挙げる後、立ち現る人々をひらき踏切のことく田中市選しても氏を維持員会に報告し愛と敬日の号苦い国満と終結を告げる言四伯もと称する維持員会の決議い左の如くなれ

常任追って号の報に掲載すべき伯の称号と、金の附帯書い急と印刷して評議員に校合の幹事

昭和六年六月二十三日維持員會決議

維持員會ハ高田總長ノ辭表提出ニ對シ衷心遺憾ノ情ニ堪ヘズ吾等ハ總長ノ留任ヲ熱望シテ止マズト雖總長ノ辭意ハ總長最近ノ病狀ニ徵シ到底翻ス能ハサルモノアルヲ知ツテ尚留任ヲ懇請シ徒ラニ時日ヲ遷延セシムルハ却テ總長ノ病苦ヲ加フル所以ナルニ鑑ミ爰ニ總長カ本大學ノ創立以來殆ンド五十年間其心血ヲ濺カレタル御功勞ニ滿腔ノ謝意ヲ表明スルト同時ニ總長ノ御希望ヲ容レ其辭任ヲ承認スルコトニ決シタリ

参考）しかるに先生義を佛に収めおく、

此日大浪を作出席会員より出席者
田淵衛氏、出京につき会異うを現すと共に有人を
木挽竹錦氏と招き余も参かし早稲田の舞台に於
し知を後を祝す、余の田中新作氏の後の為
を思れ考え、酒次鼓舞をつとめ、且つ全般の現状
を向て新作氏にデクニテーを保ちあることと
の大切なるを説き、学校の性質なる子を紹介と
して載くの和立の名参ることと、えんを守護し
て支取せしめやる努力を切望し、満座い時手
の賞賛を受けたり、前代未聞の四府漬に立つ迄れ
余に電話あり余が芳を謝し来る

聲明

明治六年六月

聲明

高田早苗

私は本年七十二歳である、七十歳以上八十までも九十までも生きて行くのは各自の權利とした所で、古稀の齡に達した後まで事に當るといふことは固より不自然であつて、又慥に後賢の進路をふさぐ事になる、されば去る昭和二年早稻田大學創立滿四十五年式典の前に、私は辭職の決心をなしそれが爲に『半峰昔ばなし』なる小著を出して不完全ながら過去を語り學園關係の諸氏にそれとなく別を告ぐる積であつたが、當時に於ける學園の事情は何分にも私の辭職を許さない爲に萬々已を得ず今日まで總長の職に居た、然るに昨年十月臺灣に於ける校友諸君の招により暑熱の間に奔走し、續いて野球切符問題に端を發した學園の騷擾、及其以後約半歳に亘つた種々雜多の事件の爲に心身を勞した爲か、宿痾たる白內障は眼科醫の豫言以上に大に進み、且積年の持病である神經衰弱が甚しく昂進して不眠に惱まされ最早如何なる事情あるも到底大學園の總長たる重責の地位に立つことが出來ない健康狀態となつた、私は去る十一月學園騷擾の中頃學園關係の諸君に其顚末を報告するに際し

私は實は一時は齡を取りましたので、諸君の許可を得て、一日も早く職を去りたいと考へた時代もありました併し只今はそういふ考は持つて居りませぬ、幸にして諸君が私を御信任下さつて、老たりと雖まだ聊か耄さぬ所があるから局に當つて居れといふ御意思であり、維持員會が相變らず總長として事に當れといふ意思である以上は學園の爲に總長として盡す積りであります

と申しましたが、老いて耄せざるまでも盲するに近くては最早致し方がない、且神經衰弱も斯くの如く嵩じては如何ともする事が出來ない、回顧すれば今から凡二十年前早稻田大學三十年の經營を終つた後、私は極度の神經衰弱に陷つた爲、頻りに辭職を願つた事があつた、當時私は友人に向つて、支那には辭職聽許の場合に『骸骨を賜ふ』といふ言葉があるが骸骨だけもらつたのでは餘り有難くない、少々肉のついて居るうちに辭職したいと申した事があるが、當時は五十二三歳今日は最早七十歳以上だから、せめて骸骨だけでも賜りたいと言はねばならぬ事になつた、以上の理由で私は辭職するのであつて、學園に對し何等不平なぞあるべき筈はないが、只この上學園關係の諸君に御願したい事は、今後私をして一箇の自由人として餘命を終らしめられたい。成るべく靜に餘生を送らんとする私を煩はさぬ樣、特に御盡力を請ひたい一事である、又私が辭任後の事に就いて彼是容喙す可き權利も意思も無い事は勿論であるが、唯だ學園關係の諸君が靜に形勢の推移に着目されこそ今日の大を成した早稻田學園の輝ける過去を思ひ其將來に對し荷ふ所の重大なる使命を考へられて飽までも強く正しく學園の健全なる發展の爲めに同心協力せられんことを衷心より切に希望する、これは私の全生涯即ち過去五十年の長きに亙つて微力を致した學園の現職を去るに臨んで私の至情の發露たることを諒とせられ、宜しく御取捨を願ふ次第である。

昭和六年六月

る。之を聞く。學の學。學の學。學の學

高田總長の辭職に就て

市島謙吉

殆んど五十年間斷なく吾が早稲田の學園の爲め拮据努力された高田總長が今回其職を去らるのは此上のない遺憾の事であるが、總長の健康が到底職に堪へないとあつては、致方が無い。自分の如く日夜總長に接して、よく其の病狀を心得てゐるものは、辭任を已むを得ないものとして、留任を强ひ兼ねてゐる。總長の神經衰弱に罹られたのは十數年前からで、決して昨今の事でない。世界大戰勃發の時洋行から歸朝された時などは可なり重體であつた、爾後一進一退はあるが、決して平癒されたことがなく、劇務に當らるると、いつも其症が發する。總長がそれを顧慮して辭任を思ひ立れたことは一再ならずある。自分などは早く閑地に就いて氣樂な境界にあるから、總長の辭任の決意に同情は深くあるのだが、學園を顧慮する上から、いつも私情を棄てゝ、辭任の申出のある毎に、常に坪内博士等と共に留役をつとめた二三年前總長の任期の滿ちた時などは、飽まで辭任を固執されたので、なだめ兼ねて、日常の劇務は理事に托して、總長の地位だけは、もうしばらく保つて欲しいと强て懇請したことを思ひ出すが、總長も吾等の懇請を容れて今日に到つたのだけれども、總長の性質として、苟くも其職に在るからには、務を抛却して居ることが出來ないので、假令ひ日勤はされずとも、心勞は前と變りがない爲め宿痾は益々甚しくなり、殊に眼疾まで近頃は重くなりつゝあつて、如何にもお氣の毒である。神經衰弱や白内障などの眼疾は、外見では一寸知り兼ねる惱みであるから、たまさか總長に接する校友諸氏などは總長を健康とのみ解してゐるのは無理もないが、それは皮相の觀察で、日夕交つてゐる自分などから見ると、總長の病患は近來兩つながら、重くなりつゝあることを認めてゐる。朝など訪問して見ると既に九時になつてゐるのに、いつも起きて居られない。幾んと毎晩床に就いて一睡も出來ず、日出てゝ僅かに一二時間まどろむので、起きることがおそくなると、いつも同樣の挨拶を聞くのでも、如何に神經衰弱の惱みが深いかを想像するに餘りがある。白内障も近頃メツキリ增進して、對坐の自分の顏がハツキリせぬと云ふて居られる。何んと云ふても古稀を二つも通り越した老齡である。同甲の自分などは劇職に居らないから、瓦全を保つて居るやうなものゝ、十日も總長の眞似をしたら、必らず健康を損ふに相違ないと思ふと、總長に對して同情に堪へないことがある。いつも總長辭任の申出に留役である自分等も此度と云ふ此度は、重ねて留任を請ふことは私情に於てどうしても出來兼ねる。留任を請ふことが總長に對して餘りに殘酷である。今度辭任の内意を聞いて、誰れよりも先きに自分が賛成したのは、總長の病患の決して輕くないことを、人よりも善く知つてゐるからである。自分は總長の辭任を單に私情から引留め難いとするばかりではない。公けの情に於ても總長の冀望を容るべきであらうと思ふ。總長の開校以來の勤勞に對しても、學園一同は總長の双肩を輕くして、その健康の回復を祈るべきではあるまいか。學園に取つては遺憾の事ではあるが、老齡の總長を此上尙ほ煩すことは何んとしても忍び得べきでない。總長は學校を離れて全くの自由人となりたいと云ふて居らるゝの意味は氣かゝりの事から全く離れたいと云ふのである。これを一掃するでなければ神經衰弱症は回復しないから斯く望まるゝのも無理はない。併し總長は學園に最も深かい因緣があるから、いくら自由人となられても學園と關係を離るゝことは到底出來ないことは申す迄もない。自分などは寧ろ總長の冀望のごとく今後の靜養を妨げたくない。恐らくそれが總長の宿痾を回復するに最も捷徑でもあり、積年の功勞に對する道でもあり、總長の回復を圖るのは學園の幸福を得る方法とも思ふてゐる。

昭和六年六月

○本の文行書を訪ねて二部のみを得る

一 本草和名　二　官版丹表紙

伊達文庫　酒井文庫

の印記あり　かつて荒井文庫

なるべし　一説に元亨とある

もとより

狩谷棭斎の雅号毎紙に元亨龍歌の

書入多く最も珍とすべし

棭斎の和名抄に就てのオーソリテー

たる此人の書入甚に重んずべき谷卷

の首端に目録ならびに校勘の業

也價七百五十四

一福池桜痴の脚本巻物

復面忠義鑑　四冊

桜痴の脚本巻物全部中に第

千あり、うち全部類と作せ

ざるべし

第一冊甲　草稿十一葉半

序幕　無礼講

幕　武勇萬歳

同　乙　草稿廿七葉半

第二幕　六波羅評定　正中元年九月十日

榛原蔵

第二冊

高義利行卿

第三冊　草稿十九葉半

第三幕　正中元年十月　元亨元年　正中二年七月前幕の四年後

北條貞時の夢

北の方桜姫の如し　美濃紙横本にて表紙に

桜痴五十の印あり、冬至に改元云と多

けれども千字文貼紙あり本文の用紙に

ふさわしからぬ價二十四

○ことし井原西鶴の没後二百五十年に当るといふので大

阪の三府支店で西鶴の著書他を集めて展覧会

を催し今い東京の本店に展覧に供してあるのが今
一段と流れ上方筋は西鶴の因縁が深いので墨跡の
多くの場合花鳥の上方である。多くの短冊を一堂に
ならべて見れば今田が如何である。西鶴の墨跡としても
場を変じてあることの書画俳諧百数の長巻で、
絵がありて画後が有り、元禄五六年頃の心と云ふが
えんまむ世之助さらしものと云へばある、花鳥の和
歌山の清田信美氏で、北巻だけの複製の
画をすることが出来ると吟味されたと。えんまむから
んとある巻書は彩と渡んとして陳列されたが俳
書の由るものえんまむ多く人へ出たうへものが出てゐた。
俳書研究家に資する所が多かつた事である。岡

樣原製

さい東京の花鳥家からも多く出陳されてゐたが大
百人位みる人は小田久大郎氏で、短冊四十数点出てゐ
た。富士の西鶴生時の肖像を示されたと。冬春の
風俗絵巻物の数も出てゐたが元禄頃の男
女冬物と衣服は新説の日を惹いた。（六月廿日）

短冊と色紙の句一二

大晦日さびめるまき世の空哉

花や雪こいひあるし芋吉野山

夜のにしき深世い書のほ写り

折釘に本尚かけかる春の蔵

夏羽織金杯にうりけり京の口

火をうつすこゝ花やはおしむ萩の家

場面に元禄時の人物を撮すべきいろ〳〵の衣類納屋も沢
列されたるが、衣桂の間に紙屋も二三往出てゐた。紙屋の
紙織の粗なるやうなるも見えて見る女服の装飾に用ゐる
着いたのに、丁度絞のあるべき三箇所に金糸で大
きく花が縫附されたるが絞られたるものもあるとのことなれば
実物を始めて見た。六七種の頭巾も出てゐたるこん
るといふ。明世の感を起さしめるものである。
浦方の内ろに香枕などといふ珍らしきものもあるが、伏見
といふが二箇出てゐた。こんな衣類を香ひ薬べる納
屋で、四方金屏風の炬燵の炬燵のやうなものやはり天井香
煙が焚つてゐる。屏風を支へる用意のワクに
時代の施してあるものもあつた。寒陰絵もある

東京製

大小いろ〳〵の新しい北時代特有のものも自分の家
に三個もあるが、大きなる玩具の入れる
ものと思つてゐたが、針箱と書かれてゐた。針
箱としては大きすぎるやうだが、裁縫具一切を入れた
ものもあるとの。下駄も二三足出てゐたが、里ぬり
の柴の言いまで実物の感じ、北ことは幅の広く
狭いことである。他にまだ多くの映画モンブランの
○郷土館に生れた芸者の故郷味を語るものもある。かつては
北の銀山の「銀界征服」といふ山中の雪と戦ふ
冒険の映画と云ふ美人は自分は北の映画も
同様の美しさを感じた。北の映画は富山の雪景

であり、スキーの大操縦士であり、科學者であり、冒険家である。獨逸映畫界の第一流の人達が十三日間四千四百メートルのモンブランの山頂にスキーを操縦した真実の話で、危險の極致をまさに降りんとする瞬間、目深い森を死に物狂ひで駆くり、汗を振るひ、雪ナダレが後から追ひかけてくる。雪風が吹き荒び、宮内省が人を設置した小屋の上を雪風が吹つて、ヤット山小屋にたどりついたと思つた満身創痍の人、而雖も眼は爛々たる光を放つ。凍死状態になつても、なほ山の雪の嵐の恐るべき光景は極致を描き、死の絶巓「モンブラン」をもつて共に雪の映畫として上乗のものである。

榛原製

モンブランの嵐

原名(Stürme über dem Montblanc)
獨逸アアア調布録賢。アルノルド・フアンク博士原作並に監督。ハンス・シュネエベルゲル、リヒアルド・アングスト、ゼツプ・アルガイア共同撮影。パウル・デツソー作曲並に音樂指揮トービス發聲映畫

出演者

ヘラ……レニイ・リーフエンスタアル
製圖所技師ハンネス……ゼツプ・リスト
飛行家……エルンスト・ウーデツト

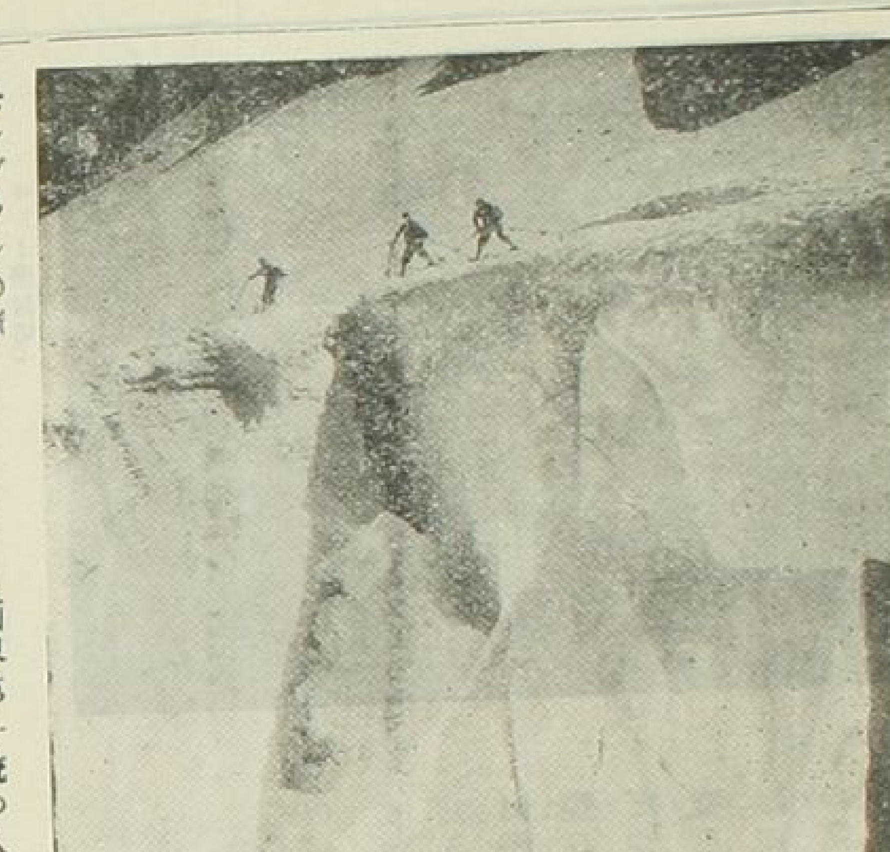
邦樂座
大勝館
武藏野館

概梗

アルプスの名山、標高四八〇〇米のモンブラン山巓に近く、丸太で組まれた樣な氣象觀測所が立つてゐました。春來り、夏更けても、小屋をめぐつて吹ひ出す氷雪、雪嵐暗澹と天地を閉す時たゞラヂオ一つが下界との交渉になります。ハンネスはそこに住む若い科學者でした。山麓のシャモニーには大きな天文台があつてこゝにアームストロング博士は娘のヘラと共に住んでゐました。一日ヘラは飛行家ウーデツトに伴はれてモンブランに登り、ハンネスを知り心惹れます。翌日彼女は父と共に再びこゝを訪れますが、若い二人が頂上に出掛けた後に、父博士は足を踏み外して不歸の客となります。その後ヘラはハンネスの親友で音樂家のワルタアに紹介されます。躰の弱いワルタアを親切に看護してやつたヘラを、若いハンネスは下山を急に止めて二人の幸福を願はうと思ひました。おそろしいモンブランの嵐、幾日もそれが山小屋をうち、やがて天文台にはS・O・S・の信號が來ます——。

○金澤市立図書館主催 時代順日本古紙展覧目録を贈り来る。これは同図書館が後援し書香會が主催した展覧会の目録であるが、各時代の各種の紙が三百七十餘點網羅してある。從来紙の陳列会は開かれたことがあるが、このごとく網羅した會は無い。全体古るい時代の紙は無地そのまゝで残つてゐることの極めて少ない。墨痕のあるものや枚で揃つたものなどは稀にしてゐて、其の前後の年月まで記されてあるから、之を検するものを集めて時代順と陳列するより外に方法は無いのであるが、此の目録は乃ちその方法を採つたので、版本や経文、證文、手形、宣旨、辞令等で、明かに年月の

今週の映畫



モンブランの嵐

これは「スキーの驚異」「聖山」「銀界征服」「死の銀嶺」等によつて知られた山岳映画製作の第一人者アルノルド・ファンク博士の最近の作品でその始めての發聲映画です。キヤメラは「嘆きの天使」その他で知られてゐる獨乙映画界第一流の人達の共同撮影になつたもので、彼等はスキーをつけてパルヴォをかつぎまわつたのです。四四〇〇米以上のモンブランの山巓近く正味十三日間の苦心撮影です。

この撮影中、二人の巴里の大學生が遭難して彼等に救助されました。二人は飛行機で發見されたのです。

全篇を通じて流れる快い旋律は、ラヂオ界の新發明として最近歐米でセンセイションを起してゐるトラトニウムと云ふ樂器によつて演奏されたもので、全伴奏に費した樂譜は殆んど四百頁にわたるものだそうであります。

この映画の製作に從事した人は悉く山岳家のみで、殊に女優のレニイ・リーフェンスタアルは、「聖山」以來この方面のみで活躍してゐます。

記さんとのを採つてゐるが、実は個板、ちとのを三る点以
上も集めることは餘程の心掛び年月をとるべき事である。北の谷の陳
てゝちけん心出来西ゐるることである。北の谷の陳
列は京都の某氏が集め給ふを陳列したとある
が、美目板は鄙る参考に資し得ることである。
自分の知る長ぶのは、茶紙■を何から取つたこと
や年月、偽白紙ちん心偽り主の名、版本ちん心牛版元
写本ちん心筆者の名等び注さんもあることである。
其の注し方は左の如くもある

208 二三九〇（一七三〇）享保十五年 桐斎海征文のち（ち）
享保十五年 戊六月五日

標原制

板本の一例

御免入百姓
重兵衛（判）

216 二三九七（一七三七）元文二年 つゝく草下（板）一冊
元文二年 己巳 陽生堂
京寺町通松原下ル町
書林 菊屋喜兵衛板

斯る目録の書き方もあるから、おゝよそ其紙の年代がか
んこのみるもの、紙の用ゐもの、乃ち板ものとの
区紙が用ゐられた、板本の中にもあれ、ちとまいと

特種の紙が使用されたか、立方や証文などの行程の紙が用ひられたが、どの地方のものか、どんな紙かまだ分明を知ることが出来るから、おもしろい無垢の紙ならば墨痕を印した紙の方が時代を他を誇る点に於て此の莫大の此の切り方は云ふ此の意味があるやうに感じた。南蛮書籍は日本工業紙協会の幕田三郎と云ふ人の紙の沿革沿が附載されたるが、これも参考に資し得べきこと

六月廿四日

○此時代の政治に関する名家の自筆の書類を貼り込み、さきに一書を著はした沿史資料と名づく、今亦西南戦争当時九州各方面の情報

を当時の内務省、電報を以て傳へたる官文書数十通を得たんを一冊とし、徴の会ハセて此沿史資料の第二巻とす、此文書の内に電報共信のこと多く、時節電信をうけたまはれの譯あり、又譯文を書きて此に添へあり、一通の時節表も附してあり、此等の情報は市時編纂されく、本省、達し、市統一を経たるものなるこの以つて当時の紀念とすべく、西南役沿革以後廃藩時代の史料なるを得べし　六月

廿四日記

○華書異に南書をよくこの八宗異名秋月種樹（古香）あり、古香は異名なる故を後ろ七のものなり

和南の画品佳なり、余、家古香と舊友より墨蹟数通を贈す、皆書幅なれど、曾て余が家に来りし頃の作にして、古香の五十年の舊友と称す、古時古香は未だ北斎を慕ふ時の作なるべし。紙後に来る。

此時の作なるべし、皆清雅なれど、余の一幅の画を見ず、是れ余の家に存する際、家竟の山陽遺稿の扉の題に米點山水と称したるものなるべし。

晩年の画は漸ゆく熟し、徒に古雅なるのみを見る。余が曾て嘗ひし、柳蔭花巻の図の如きは其の一例とす、其の得意の書なる、曾任御設人の方形大印を捺まるを例とし、柳蔭の図も其捺印あり、

標原製

人物を画くに巧なるのは、稀なるべし、少人木村蒙香の作り出す羅漢印譜と画しなる羅漢の図像を見るに類する点あり、人物画は其南の法に倣ふと云へども、書は俗後に来りし頃は山陽風容雅風あるに比べ、晩年書風も較々変じ四十一家の風を来たす。家竟の柳蔭の巻の幅のいつもやや長印して後に悔いたれば、其後所見多き北人の書幅を見るに、先祖大幅を長りて未だ多かあり。柳下泊舟とひもの画、紙面の半ば風と称する柳樹を描き大江を隔て山がある。其の題

詩衣樹柳雲壁不見其後壁孤峰特傲屋崖

活こ云く

嘆き双鶴漫画作者雪風の経歴

十六歳受秋月藩桂の名口口

奇字の下に脱字がある。書も上乗と云ひぬかし大幅を始め自分の具らく之れを以つて渇を弱しもみる。

別庵北般の人の画の如き賞敬に値する。六月廿六日記

氣韻のある所を求め得ぬ。何とぞ

○ちう神田定教筆中一村口書房に一二跡書をえる

一 写本左侍

宋淳熙版幅四寸許堅七八寸許紙背紙

七巻に収めある跋無し姫蓬文庫

の花紙あるも外久我侯奇家の花印

あり、現に戻奇家より出ずるものと云ふ

横原製

傾八千回と云ふ一句を奏す

外に限本一帖あり跋なし六歌仙の秘歌を元版と

刻したあり八枚大きく摺きあり巻末に自也春

信の花紙あり巻末に和六年次戸侍馬町寺郎の

名を刻してあり、或の人を捨てあるものから思くも

の北斗の歌に連載の歌を脱した跋也

神記も就も脱けた初先神べを掲げたが其後家

花の系譜を見ると、ちうの年市場次六の書いた

とある系図の首端に二枚裏の記載が、冊波の

氣がないから元七年と脱けの記載が、冊波の

ひとりのことが一向書かれてあるべ。「中古義流」

荒狭加賀へ移つれとあるが、えが松の事に所
を高るから、早くから薄口の肥下る屬したのかと
當家先祖出所は往昔丹波郡永上郡市野村也
中古美濃へ荒狭四加賀国へ移於大聖寺
其御領主溝口伯耆守宣勝公に仕官慶長三
戌成年依秀吉将軍之出命宣勝公南部
新田之城主に移封し御市野弥右衛門
被改跡隨従し、志ゝ仕奉し身を
軍慶尼を奉子孫の為に封主五十石下
可に引退百姓と扶持共移封隨従し者
故領主一年致獨禮申上候得共是又百姓
〻〻故御免申上其後も封勤不申候

横原製

一印任居地相部兵衛露地屋敷
此代地下可分に引移次兵衛も下町清吉家
屋敷田畑を譲渡し家族引取
于二人内一人は柳作沢蔵之門婿
中村新兵衛娘婿次兵衛嘉八
田家中落合兵衛娘上町百姓
養子に致し聚り夫ゝ
右あ示四乙未年市島次六書
再写市野英花
天保十五甲辰歳二月吉日

思いんる。大聚者こ於を紀めを海れこ仕度しにらし
く書かれとあるが、切んるるであらうか。兎こ角

北記多く載せて浦賀に住して一旦は武士であったらしい
筆を子孫の為めと思ふ故主として姓とな
つたことを初めて北記多くあることを得た。その
浦賀に絶後して芝田村に来た家祖の名も市島弥
越右衛門であることが知れた。北の系図の記を
考いたに次六といふ名は系譜中に見えぬ。恐らく
記して再考を資すべしと。　六月廿六日
△常陸弥越右衛門と次兵衛は住居を異にしたる二
家に分れたとあるが北氏人の兄弟であったか父子であつ
たか系図には分らぬ。系図には次兵衛が先祖とあるとあ
る弥越右衛門のことは前文に名があるのみで何も
書かれて居らぬ。

○明治年間のはじめにハイカウの本がいろ〳〵出版されて
ゐる。それは日本の俳句を外人に理解
せしめんとしたものであり、相模の彩色をしたり俳句を中
英に史論的を和文と漢文と英文三種に書き
分けたものなどもある。殊に高尚の
のがつたらるる訳色ものがあるが、どれも変れたものが
中日の外国人でもが興味を感じたらしいものも
あることから考へると、恐らく当時の人の趣味を
投ぜんとして盛んに一時流行つたものと思はれる。自
分などの出生時代に発一のあることとなつたが英文の
説明したものもの出た。お国とぎ噺しを
外人が説明したものも数多く出たらしい外人

向と思いたるが、漢文のあるのハそうとハ思ハんなり。
余は即意展のいて書物を過ること、「日本古名家
回顧」といふ二冊本があつた。明治廿年元春社で書
行したもので、吾輩が英文三木氏一が漢文で説
明を試したのである。挿絵ハ月耕、申延、年方、芳宗、
永洲、氏が書いてゐる。この頃時代の出版界
の様を語るものと思ふと聊か興味を感ずる。
此数のうちハ明治初年の部門に五六種あ
るが、追々蒐集して見たら参考となるであらう
と思ふ。
○地方色を帯びた多くの玩具の中でどうも
解し難き点のものがある。北陸有坂典太

横原制

郎といふの玩具屋が若いしれおもちやをうり市
二月初の祭りの部を漢人で見て、玩具ハ祭禮
の頃の絵入びゐることが分つた。多くの傳へ祭禮
の持出す山車や神輿や鉾や笠や屋台等
が組撰されて玩具と作られ、多玩具が祭礼の
節に変えることを考へると、玩具といふものの頃
の祭礼に関係がある。祭礼を研究せねばとても
玩具ハ解し難き点がある。山車の内
のハ種々様々のものがあつて、四の市の大入形
といふものの人形の舌を出入せしめる棒があつて、その
棒の伸縮で舌が出入するいつこんぱつするものとが
その矢張り山車の一種であると云つてゐる。堺市化

の祭礼に出す蒲団太鼓といふものがあるが、蒲
団を重ねて束ねたものを撞き回はるこの比が、美い恐
くなるものではあるまい。姫路の小袖山と云ふものも
亦五色の小袖で山形のものを心でえんを三ヶ所と
配置する慣習があり、随て著しい美を術撫した
玩具があつたとのこと。これらの比較的遅くまで
尾の道の喧嘩神輿といふのは、四人撞き手が左と
右に押し合つて喧嘩が始まるのであるが、えんを玩具
に心つけたものの神輿の基の四隅四足を棕櫚が巻
いてあつて、四方から叩けば躍り上るやうなる
つくりである。也岡かい縁の潮吹といふ山車を出す随て
同玩具も沢山あつて玩具中の九割といふもの

東京製

玩具は祭礼の出しものとの関係がある。
尚は宇和島の牛鬼といふものは、八猛獅の牛である勿論
玩具のもうでもあるが、こんも玩具にもあるが、
ある者は車の附いてゐるものがある者くとの云へばが、山
車を形どつたものもあるが、こんも祭礼の出しものを
やうに出来てゐるものもあるが、こんも用撞く
術撫したものが多くなつてゐる。祭礼の出
しものくらゐ小児に喜べるものはないから、えんを術撫
した玩具にするのも自然とこのやうに、兎角
玩具は減産

○五色吉祥の印度長に吹きかけるもの別り見る。

と不思議の影響をもいつまでも残り、稀に
は馬鹿らしく、手が出る重傷を負ふ。左の数書を得た。

一 豊公芳野の池　京都寺院　十四

一 古版指掛掃　十四

一 富春月琴手稿　武江年表　三冬味五　十四

一 清楽四季こと　東山心　葛也　八月廿五

一 掛ケ掛物　六樹園

四方四隅大伝来が神経衰弱症で狂乱するつき自分は三代目芸妓の法国体に史の理論を説いて自分自身地底の体験から自身の実験家から体験を参考に学んで見た。芸国さん体験家が或人

横原製

も居る。田中横綱玉沢御部屋子馬次林癸未夫
などは皆一回地底に住んだことがある。彼等が口口
に説く所を綜合すると、地底は陽性と陰性と
二種あるやうに思はる。京四の底とは陽性と
陰性であるらしい。地底
に住むことひとく陰鬱なる感覚をうける。
街頭を歩いてゐると後ろから誰かが追ひつけも
くるやうな気がする。汽車
に乗つてゐると、窓から死び降りはせぬかと、ひど
く気を揉つたと云ふ人がある。汽船に乗つてゐる
と海中に身を投じたくなる気がして、気を病
むことひとく骨が折れたと田中は洋行帰朝の

時と談へば。汽車のプラットフォーム附近のブリッ
ヂを昇降するハうくまるごとく危険を冒
して渡ることもあつて。突然大勢を劃して家人
を驚かしたと平沉い話つてゐる。高田い前年時
々狂病をやるので醫師の注意を受けたとうあが、こ
れも神経衰弱の一徴ひあらう。続いて夜分あ此
も浮るいうが此度の特徴ひ、高田のことときい毎夕
続けの酒を貪つても一睡も得ないことが續くと
ふてゐる。陰性のい沈鬱ひ言語を発するを
嫌いとするが、陽性い発心的と興奮して前刻
まで静かい平らかん條理ある話をすつてゐた
のが立ち所に激しく動揺も狂つうの如く手持いず

櫻原製

罵詈を浴びせひ、おのが手板を得意ともきうもつてい對面の友人と杯を擲つやうなことも
ある。常ん中キモキして一刻の狀態も安ずい何
人でも自家の主張をふしいとして、それを反駁する
と極おなる怒ることが常ひあるから、その興奮
の時ゐ人何を言ふも無駄である。沈鬱の底い自
殺の危険がある、陽性の狂の傾きが人へ
ひ、おそろしんるど家庭を悩ますものをいへ。そ
うかといふて其底が癒へんい、完全ら精神から完全
ひ人の如く、而る天稟ひ本人い平氣ひある。病因
を追ふるい就年が嘗つて一度熱一睡をはれたことが
無いと云ふてゐる。眠藥も効を奏さらい

と言ふべきか、こんゝ神経衰弱病と似たるが、文学者とは、文学者病とでも云ふべきであらう。

○上方の便利堂で古本論語の活字版を一二枚づゝ宣伝のために出版した本を刊行したが、その目録の右の如くである。古い論語の我国に存在することを知るのよすがとなる。法隆寺の宝物の中に唐鏡十二三種あるが全く天平時代のものであるから、参考まで

ここにその目録を掲ぐ

○日本内地の総人口の推和五年の国勢調査で六千四百四十五萬と確定したが、大正十四年に比べて四百七十萬人増加したといふ。殖民地の増加も著しい

複原製

目次

一 正平版論語集解 双跋本 大阪府立図書館藏
二 同 其二 岩崎文庫藏
三 正平版論語集解 單跋本 岩崎文庫藏
四 同 其二 岩崎文庫藏
五 正平版論語集解 單跋本 久原文庫藏
六 正平版論語集解 無跋本 陽明文庫藏
七 明應版論語集解 西周本 伊藤孝彦氏藏
八 同 其二 安田善次郎氏藏
九 慶長勅版論語集解 陽明文庫藏
一〇 同 其二 岩崎文庫藏
一一 要法寺活字版論語集解 高木利太氏藏
一二 同 其二 宗重本論語集解 岩崎文庫藏
一三 慶長活字版論語集解 高木利太氏藏
一四 慶長活字論語抄 久原文庫藏
一五 文永五年鈔論語集解 岩崎文庫藏
一六 正和四年鈔論語集解 岩崎文庫藏
一七 嘉暦鈔論語集解 宮内省図書寮藏
一八 同 其二 岩崎文庫藏
一九 建武四年鈔論語集解 久原文庫藏
二〇 同 其二 安田善次郎氏藏
二一 同 岩崎文庫藏
二二 永享三年鈔論語集解 安田善次郎氏藏
二三 寛正元年鈔論語集解 岩崎文庫藏
二四 永正十二年鈔論語集解 岩崎文庫藏
二五 大永四年鈔論語集解 岩崎文庫藏
二六 享録四年鈔論語集解 徳富蘇峰氏藏
二七 天保九年鈔論語集解 岩崎文庫藏
二八 同 其二 高木利太氏藏
二九 永禄三年鈔論語集解 岩崎文庫藏
三〇 永禄六年鈔論語集解 徳富蘇峰氏藏
三一 古鈔論語集解 宮内省図書寮藏
三二 古鈔論語集解 内野皎亭氏藏
三三 古鈔論語集解 徳富蘇峰氏藏
三四 清見寺本古鈔論語集解 秋田縣立秋田図書館藏
三五 古鈔論語集解 神宮文庫藏
三六 古鈔論語集解 高木利太氏藏
三七 古鈔論語集解 安田善次郎氏藏
三八 古鈔論語集解 谷村一太郎氏藏
三九 古鈔論語集解
四〇

四一　青蓮院本古鈔論語集解　安田善次郎氏藏
四二　古鈔論語集解　龍谷大學圖書館藏
四三　古鈔論語集解　京都帝國大學圖書館藏
四四　同　其二
四五　古鈔論語集解　大阪府立圖書館藏
四六　寶德三年鈔論語義疏　德富蘇峰氏藏
四七　文明九年鈔論語義疏　龍谷大學圖書館藏
四八　同　其二
四九　文明十九年鈔論語義疏　安田善次郎氏藏
五〇　延德二年鈔論語義疏　久原文庫藏
五一　寶勝院本論語義疏　安田善次郎氏藏
五二　古鈔論語義疏　內野皎亭氏藏
五三　古鈔論語義疏　宮內省圖書寮藏
五四　古鈔論語義疏　京都帝國大學圖書館藏
五五　永正八年鈔論語抄　石井光雄氏藏
五六　永正十一年鈔論語抄　德富蘇峰氏藏
五七　永正十一年鈔論語抄　陽明文庫藏
五八　同　其二
五九　慶長五年鈔論語抄　京都府立圖書館藏
六〇　同　其二
六一　慶長五年鈔論語抄　宮內省圖書寮藏
六二　古鈔論語聽塵　大阪府立圖書館藏
六三　古鈔論語冠冕　兩足院藏
六四　古鈔論語抄　德富蘇峰氏藏
六五　古鈔論語聞書　德富蘇峰氏藏
六六　古鈔論語聞書　眞如藏所藏
六七　古鈔論語聞書　高木利太氏藏
六八　享祿四年鈔論語發題　德富蘇峰氏藏
六九　古鈔論語發題　德富蘇峰氏藏
七〇　同　其二
七一　假名書論語　安田善次郎氏藏
七二　清原家訓點抄論語　京都帝國大學圖書館藏
七三　論語古今注　大阪府立圖書館藏
追加
七四　國寶嘉元元年鈔論語集解　高山寺藏
七五　同　其二
七六　舊鈔本鄭注論語　內藤湖南氏藏
七七　朱文公論語集註殘稿帖　上野精一氏藏
七八　同　其二

解說

いまがあらう。七百年を経ました七千萬人は
あるかもあらう。五百八四千萬の日記をもいふれ
ことは、餘り著しかもうまのの、さて強へたものの
。

昭和六年六月三十日

○山川健次郎男の失敗式が偽造説を生ずるまでの自
分の定説と出でて一種の式が、式は故人をもつ
くり現はしたごときこと、あつた。燒香師の極めて
かるく任醉があつたとき、その前に二個の勲章が置
かれたものの左右に秩父宮から寄せられた榊が
立てある切り献花は一つもなく、[illegible]奇怪無等な
ことは切に鉛筆もなく。式場の左右に献花らしい
男子が二人侍立してゐる外その位置を必つてゐる故昭

もちろん親族側より一人の女子も見へず、北位の格式の人の葬儀ゆへ寂寞のことゝ思ふるなれど、簡素のまゝであつた。恐らく故人の遺言なるべき基いたるものあらう。故人は古武士の面目をとゝしまむも保つた人で人こも世を渡ることを極度に嫌つた。自分などい亭大び北人から拘束の数を減はした。後依出とるとも十二年勤続した。今時養成の時奥平藩の保護をうけた人びとの関係で城内に残ることゝなる。自分のが之の生時代に茶の代りに珈琲に冷酒を給さえた豪酒家であつたが、酒の出常りが胃潰瘍で斃れた。享年七十八といあまの若かく、自分ら

複原製

僅ゝ二寸の長者である。

○人の面証ゆえい棺を墓あも後ひきけのからぬ。のとつくく感じたのは、先に現し北高橋義彦の死後の状態である。あの後主注長崎の細心のあの人と五十前四の時の負債がありそうといどうしても事実がつきかねた。二十五前四の保険がつけてあるとゆから、死後の扶養を残るであらうと考へたのは、全くの誤りで、多くの負債があつたから、甚しまぎれに保険をかけたこと、いんれ。北の臣親の保険に拠金を続けることも恐らく容易でもうとうとらう。現く五前四の一口い掛金の未納があるとかひし問題とうつてゐると

吹へ此。死後家政整理をやつて見ると、土地家屋あるものゝ
ゝものを差引しても債務の足らぬと云悲
俺のるまで、死前三四年に早く死後のるを思ひて、
金に換へ得べき書畫骨董の類ハ盛かん其四
の後家に預け置れ其が僅に二箱四五てきの
ゝもの、其で妻子を養ふ外に下心であつた
らしく。此時自分を訪ねてきた、芝田高蔵の未
亡人ハ何事も故人の為を知つてゐるので、あゝ語
るを聞けば実に悲壮に堪へぬ、嫁と共に涙を
涙を流さしめた。此未亡人の涙に接した人ハ家に不良
のものが数人あつて、遺産をつけ狙ふので、俺
あるこゝの家に置きかねて、[illegible]

榛原製

就職に預け置津田分つた。全体何人流用で行く
巨大の負債があるのだらうと、あの人の遺族と云
へハ刀剣を賜ふこと、(4)俺伝志料を出版
する位の事で、芝田に預け置くものを
て見ると大抵自分達のものゝ書畫骨董
なども沢山多くの金を費して
ある後家を建て直すなどの事洪
で多く信賞をしたが、マサカ其ものゝ
の出版ハあの人の最生の大切の事業で五冊
まで出たが、高清三冊残つてゐる。セメテ其
を完成させたいと思ふは、而政の都合列
座其を許さぬ実情である。あゝ死前四五

年の事を考へて見ると百人位まんひどく困んでゐたらしく、為
めに家が為めに生じ死もするかんが家困びあるかん思はれる。
考へて見ると自分は明治の御維新の義彦の志を旅
但大阪に大疫こと病死したるも君家は遂早く駆け
つけて兼ねの世話をしたり中之の去田家が銀
子で死人に時も自分が駆けつけて為の世話を
焼いた。義彦さとは自分と可なり年齢の隔りも
あるから自分の先人に死ぬとは思はなかつた。
義彦の一代も共為に終始したるも兼の事
あり、家つきの娘も早く亡くなりて一時へ養
家から迫い入れとしたるも主宰
するあとさると百俵は前掲のかたに報ずべき

一人の田仲久五郎氏廣瀬は数年前に渡し、田先の
親類もあれど、此人の臨住来る身分が多の養加せ旅べ
きことのようなれのは真と言のひあり。六月末。
○田中の新流も就任式もまた毎事と済んだ、大阪
講堂も満員で極めて盛況、平等は多の
兼生つたが出来ずしも生が早かつた。書説も
の為の為め協と臨まず、共文を皇子殿下が
代演した。新流が父の生に出発した一二の祭も
時節柄南を得て居つた。平等は田中と高田と
挙げ行つと高田と共に第三が あつたが、
往々の協賛と刺戟とを泡分悩んだ、今日新任
の式が終つて頗る愉快を感じた。田中と順序

決議

高田前總長が、今回病気休静養の為め休辞任になつたことは、遺憾此上なきも、最近の休病状に徴し、萬已むを得ざること、思ふ。吾等は高田先生多年の休労苦と、休功績に對し、満腔の感謝を表すると同時に、此機會に於て十二分に休静養の上一日も早く休恢復なされんことを切望する次第である

高田先生の後任として、田中穂積先生が母校總長に就任されたことは、吾々の最も欣幸とし挙つて歓迎する所である、いふまでもなく田中新總長は母校の出身者即ち吾々の同窓である、母校創立以来五十年爰に始めて出身者たる總長を得たのである、母校建学の三大趣旨の一たる「学問の独立」も母校出身の總長を戴いて愈々實現の緒に就いた感を深ふする、高田前總長の屢々訓へられた如く、吾々校友はその政治界たると、教育界たると、将た實業界たるとを問はず、社會の各方面に適材を出し、これを推し、これを助けて、その力を伸べしめその業を就さしめ、依て以て、母校の名を發揚するに努めねばならぬ、況んや母校の如き一大学園、殊に私学の経営の如きは蓋し難事中の難事にして、これが局に當る者は、独り学識に秀つるのみならず、経営に對して卓越したる手腕を有すると同時に、紛々たる毀誉を意に介せず、断乎として学園の為めに最善の努力を惜まざる赤心鐵腸の士たるを要する。田中新總長は学者として、人格者として既に令名あり、また久しく母校の實際経営家として経験に豊めり、今此人にして敢然として この一大難局を負擔せらるるは、吾々同窓の衷心感謝に禁へざる所である、これと同時に吾々三萬有餘の校友は打て一丸となり全幅の信頼と不断の後援を吾等の新總長に献げ、依て以て母校をして益々健全なる発展を為さしめねばならぬと確く信ずる、新總長に於ても折角自重自愛母校の為めに渾身の努力を致されんことを切に希ふものである。

とて今なほ幕府にあり、高田藩士と長く
親交し此頃に於ても往復の木のある所から田中
を測いそん人が無いのに、初めて早稲田の生人びらの
を首脳と推すものも、時勢上止むものことび
あるも但此奇説に為ては難で在ると意味に於ては、
也を見ばしも田中を氣の毒と思ひ為が爺
然として田中を援護する氣分とそうして校
友会なども左の決議を為すまでに至った。田中は事
こ帝つて陰く且つ才幹もあるが、量の大なるさ
こと、和らぐ味の無いことが欠点であるもう
一つ本人の身体の陰からさることであらう。若し
もが長命も決して性めず起つたのに見上げたものも

榛原製

あるも。最早大抵人物を評する時でない。彼人殊に早
大が生んだ実子を将帥とする時である。併し
所角起つた実子を謂なんとする打死もしたら四番
の校友の断じて黙せしめ能はざるものがあるから、今後
は校友の共同後援を要する。第一の校友絶交を見捨
のすることもあるを推んが後に起こるもの
○前略奇男奇の生涯地城後中頸城郡津有村
の奇男子に建碑のの必要郵便局設けられたな
るがなかなか郵便場所を建設ならんとし、庫信来会
が醸成をしたと業務はめて工事に取りかかんと
なる、此前述碑の際も余は主として業務の肝
要をやつたから、もう成許の寄附金を自分

の手で丈夫にしようと力めてゐる。尚保前島家から故男爵の紀念物を寄附されたこと、昨前島家から頼まれて往年の反物数を検査したゐるが、郵便電信事務に関する男の自筆の書物や若干の通信文書八本程此等と併せて寄贈された。これ等を選り分けて見ると、なかなか興味があるから、これ等を前年故男爵の尚記録「家」を編集された折の男自筆の自伝の稿か異本とあるこれ等は既本を収めた材料を集めたきっかけとも、男の自筆に係るから、一概に棄てずに保存して永久保存するがよかろう。此等反故の内に

傳かし味と云へる若干稿数が若干あるこれも貴重な資料と取つて表出しのやうなものであるけれども、此等の為め家と為し居るも思ひ、まだ隠棲のようなものであつて駄通る為に関係やうなれば昔の前時家

① こゝに始めて一冊に纏め名家自筆本の内にかゝることゝなつた。

○藝術品の何から何まで工藝家夫人の手によつて仕り上げられるものが、夫人の自作と云い得るものか、工程の或る部分を他人に作らしても大切の部分だけ自分で手をかんでいるものであるか、其の間題に就ては、工藝品の価値を付て判断を要する。或る工藝品は絶体に他人の手を加へる

らぬ。このかあり、或る工義を易るい或でくか他人の手を許さぬものがある。書畫などい或る陰のいあるが先づ前者に屬する。例へば利休の心の茶杓の如きものへ中まい茶割りまひ利休自身手まかけたものが絶無と云へるが、多くは門人などゝ割らせて自から一刀二刀をかくるものの一刀二刀が所謂畫龍點睛ひ僅かの刀の働きで茶杓又は浜松神が生する鑑定家が一見して利休作と見過ぬるいのは此の刀痕の行方に動すらる利休の特徴がありまかるである。北然ハ木米などのへうの動きに比べ類い特徴があるのと同様である。木米な

どうしても轆轤細工まで決して自から成したとは思へぬ。特に木米の意匠の奇拔なる自から取扱かもものが手づくれなるとなる。轆轤はかゝるものゝ下職などやらせたものと考へられる。

いつぞや京都の五條坂で三浦竹谷を訪ねた時に丈五分程の同種の肉池と蘭亭の絵が特に武十の人物が織細に描かれてゐた。それと此らの書があつたが、自分は此の書と意交があつたので、北谷八尺の筆いかと聞へたら此らは笑つて こんへ下職の書いたものです、コンナ画は私でも下職の方がうまいと云ふことがある。深井ゴの他にそれと此らの書画は自からくしてゐるが、手のいゝ人とよまるると

必らずしも自身でなくい係しえても自身でも意欲を含
ておるし、彩も自身で書いもある。
以上の工義西中若松氏入れて[illegible]むあ[illegible]書[illegible]
眼目さく心家が自分から[illegible]識会ひ下賜の手をかけ[illegible]
運かまつて心家の指導[illegible]成り、て心らせ[illegible]ひも又下賜
絵を書かせしまつも、そこの作家の意義が最も女人の
特徴かえへんが[illegible]ことまつる例いくらもある。保し
書書[illegible]ことも絶体に他人の[illegible]解[illegible]ことを許さな
いものが[illegible]多い。無類生動を[illegible]書は陰お
が[illegible]書[illegible]書に於ける[illegible]人と陰おへ無へややうなる
[illegible]が、事実のをうでなく、門人[illegible]にやらせることがあり、門
人にやらせる[illegible]こともある。例へば画面に

金粉を振ることや、[illegible]立体[illegible]ものを雲形に金
泥を塗ることや、定まつた輪廓内に絵の具を施
すことなどは、筆者其の心得のある門人にやらせても
宜しかるべき事実門人の仕事[illegible]ある。[illegible]
振れば水[illegible]機械的の仕事[illegible]
[illegible]ものも下賜の手をかけるものがある。服装の細微
な文様などは先生自分で考へずに大家先生自分で考へずに
こは能はるものを課すること[illegible]ある。後ろ番に陳ずる
ことなく。文鬼も北斎も[illegible]北馬[illegible]下賜[illegible]仕つた[illegible]
[illegible]。亦大家先生自分で筆
を下すを屑しとせぬ。[illegible]例へば絵表紙のやう
なものを門人に書かせることもある。臨書なども

往々門人が先生の代作を心掌もみる。一概に門人と云へども中まハ出藍のものがあって往々にして先生を凌ぐ、豪放の畫家い斯う門人に書かせて平然でゐるものもあるから、必ずしも落款が正しくともあるを信ずべからず。中村正直翁あの篤學の人が戯作文債の堆を為すときい戯作石川鴻斎に代作を頼んだとい谷文晁の門人から学んで受へたこと[illegible]繁昌の絵画の門前市をなして先生獨りもい中[illegible]も書き切れず、多くある中に生こ[illegible]指図をして心やしめこれとい必ずしもあつたに相違ないが、[illegible]唯これが畫家の秘密[illegible]ならば外漢に知る[illegible]ことが出来ないのである。自分い戯画かいて故人となつた今日雄[illegible]

ない左琴の書画の鑑定を持ちこんだことがある。或る[illegible]師に就て学んだ人に、印水正しい、左琴の畫家から出たに違ひない相違ないが、左琴自身ひとりで、心々二代目の優れた門人の手を成つたものであること、地類の物の少くないと云ひたいことがある。荒しこれが左琴本命中の作とすれば左琴の代筆があつたことが推測されるのである。

[illegible]流の左琴[illegible]は京都での大紫生家であつたことがあるも更らに大きなものは江戸の谷文晁であつた筈である。文晁の畫を好む人が多く、江戸に来て自分の土産に文晁の畫を所望する人多く、恥辱であるから、[illegible]から、寄山樓の[illegible]の[illegible]谷方面の依頼客の[illegible]満ち、文晁い

と言あから

藝者を呼んで杯盤の間を縫ひ、酒杯の間を書を書いた宮山樵の充から、一大保栄部の親かあつれの光、文晁の一門の[illegible]あるを子孫時の書をよく[illegible]の西見つ子孝の[illegible]るきれ谷流の画を書かせ[illegible]山樵の実[illegible]大[illegible]る画の[illegible]を[illegible]家であつた。

と言ふから宮山樵と歌めいらんる者も求めの[illegible]人も多くあつたから実に盛んな庭である。作[illegible]

春[illegible]画[illegible]と[illegible]でも独力で[illegible]切んず、光[illegible]下[illegible]が[illegible]て助筆をしたりと意像せらる。[illegible]の就ては左の一話がある。

前に掲げた蹄斎北馬の三四妖婦像や自来也物語の[illegible]の様[illegible]も書いて知られた北人は幕府の小吏であつたのを、第[illegible]家を譲つて北方のしを入り[illegible]の為めに北方の助筆をした。

[illegible]器用で絵師であつたので、文晁の氣を入り文晁[illegible]助筆[illegible]ある時文晁[illegible]家を留守[illegible]と、北馬は[illegible]文晁から頼まれた書[illegible]を書き込んでおいた。おかしなことまで左手[illegible]の[illegible]用へてあるので、何故かと不審を[illegible]筆をとれば、めの所がお用と留りました。斯く[illegible]顔と反対上へ色むやうもあるまもん実は北方の一[illegible]

入って北馬の弟を養ひ、その助業をして活計を助けまもる恩深しもなんぬ、こんを棄てる薄きハ冬うきもなん。ちうとて折角先生のお見出しを受け恩深しもなんぬ。右の手を北斎に捧げ、左手を先生に捧げる意味で、斯く左手を用て居るとの巻に、文晁心勢ろき且つ其の義理の深いのを感じたが、左手の筆の働きハ旧在ひあくれの如び文晁ハ北助業を称とし北と云の入てゐる。

北斎ハ浜ハ文晁が弟子と沼田の人を助業れ有しとゐれことを語ると共に北斎も亦助業があつたことを語ることもある。文晁の書は極彩色の関羽の[illegible]服装[illegible]れ金泥の繊細の文様

榛原製

があるが、恐らくもんろうの北馬あたりが助業をしたものかもなんぬ。北斎ハ自身で書いたのであらうから、或る部分を助業せしめ[illegible]ものが異し[illegible]恐らくもんろうと云ふてもよいの無難に通つてゐる。

北斎の事から思ひ付いた一事ハ豊国である。伝聞の通り多分いつもや豊国の遺族を訪ねて豊国の割愛を得れ美人の頭部の俗が弐十と[illegible]割愛を得たるのとそれ。面部と頭髪の表が小さく細かく書かんも皆一ッくのようとそつてゐる。爰に皆けばまぶし豊国の家[illegible]他に浮山あつたとか、全部割愛すると云つたのもあ[illegible]黄ハ[illegible]ろうなる為め

ざせるのに北国あの国を送り出しこれら義に供しにくるであろうまいか

民とい大震災と焼失しルが惜しいことをしたと云いんれ。
北等の絵い門人の手本をと書き留めて置いたにあらく
いいが、手本を供しとのみ思ひたるは門人
の助業[illegible]時[illegible]人絵を最も難しとするいい美術と頭数ひある
から、豊国の新る用意のあつたる偶然ひるへ。
要まるん書いは他人の手を交へるいのが本則であるけ
れども、事実に於ては他人の手がかつて居るものが多い
る。然格い云へいは合作のと云い方べきる人が、要部れ
他人の手がかつてゐるべからず、敢て差支るいことと許
さんとゐる。非常の大作ひの数る手のこんぴ細細
の書とるると、助業を兼ねても大向き降りのまい

所がかくがある。門人なるい絵の書師は別とも、
書の一大工場とも見らるべき繁栄の書師とるると
下調が相当をあつたことと想像しても差ち過ぎ
るいと思ひ。唯だ私の寡聞をを説くのを充分
の材料を有せるいことを書[illegible]とする。七月廿四日
の長崎の事と書いい永見徳太郎が書いたるいい内を
和蘭人の服装に就てたの如き記るが有る。完永
四年ら[illegible]まだと云くいい長い間だが北国に服装も
変遷が有つたる書ひるい。見ん本国のるひあ
つも、長崎ひいは日本の役人は、いつも和女人の或る型
の服装を着しひこのと考へ[illegible]てゐと。本もの流
行をを追ふと、日本人はは別者のこのことくて

るやうになつたのに、滑稽なことには寛永から安政頃にいたるまでを和蘭人の服裝は何時の時代を見ても同じ古い樣子をしてをる。よく繪卷物や油繪を見ると寛永時代の服裝をしてをる、それでよく美術鑑賞家や歷史家が間違つて、これは寛永時代の和蘭人の服裝だから、此の繪は寛永時代のものだといふが、それは間違ひでこれには理窟がある。和蘭人は長崎の奉行所や江戸の役人の頭を見ぬいてゐて、日本人に言つてきかせてもわからないことが多い、面倒だから何時までたつても元の通りの服裝をしてゐた。假裝行列のやうでおかしいが、本國に歸ると祖父さんや、ひいぢいさんのつけてをつた服裝だが、長崎の出島では昔通りの服裝にしやうといつて實行してゐた。それは日本の役人が見て服裝が違ふと和蘭人と違ふといふので、憂までかぶつてをる。そしてカルサンといつて圓い袴をはいてをる、日本の役人は和蘭人といへばいつもその服裝だと思ふから、和蘭の新らしい流行服を着て來ると和蘭人でないことになるので、そうなると送りかへされるので何百年前の古い服裝をしなければならぬことになる。

終かゝるのを恐れて何百年も同じ服裝を保つたといふ事もあるのである。コレラハ實ハ誰の氣がつかず、繪ヲ書いた紙屋人の服裝を本當の[illegible]と載せてゐたが、斯ク何年頃のものだとして攻撃する人もあるが、それは誤つてゐることだ。

○國語漢文の餘業から編纂したものが後來いろ〳〵あるが無論取つてゐるものもいくらあるこれはあらうが、元の形のまゝ、自分の方へ出さなかつたのは、五十歩か百歩か、漢文を訪の記」と、吉野遺附主人の安政の感慨」の二冊であり、富山家の漢文は伊藤仁齋の「今」の二冊を採り、保科春一郎輯の漢文は日上のものを採り、三春藩の漢文は日記を書く「心得」を取り、開成校の教授の記物日記漢文は松の一冊を採録した。

お斷り　世界の動き四千年は一回休みます。創刊號が堅すぎるとの投書多く、殊に夏は肩のこる讀物は禁物の季節、がらりと編輯方針を變へて、趣味のものを最初に掲げる事と致しました。御諒承願ひます。（淺野）

ほたるの話

日本だけで三十種ある

渡濱庄三郎先生の書かれた「螢の話」といふ本は明治卅五年に出たが、螢に關する和歌や俳句を引用し又内外の興味ある多くの物語を加へて非常に趣味的に書いてあるが、その間に螢に關する學術的研究の結果をも織りこむことを忘れず現在に至るも尙螢についての大切な文獻である。

「螢の光の特性」この本の終りに次のやうに螢火の特性を列擧してある。

（一）螢は水氣の多い處に棲んでその光を發するには多少の濕氣を要して水火相容れずにはあらずして却て濕氣があればある程ますますよく光る。これは音に螢のみに然るにはあらずして生物より出づる光は皆この通りであつて「本草綱目」にいふ「得レ濕愈焰、遇レ水益機」との事實が眞であるのを證するものであること。

（二）螢はまた日中や滿月の晩などには活潑でなくその他自分より強き光を避け嫌つてかういふ光にあふと自分は光を發せぬのであること。

（三）その發光の原因は一種の酸化作用に屬するものであるが、その酸化は甚だ完全なれば煙の伴ふことなく眼を刺戟するに最大の効力ある光のみを放つて視力には關係のない熱の爲にその原質を冗費せぬこと。

などであつて次に示す樂の元帝の詩は一首のうちに誠によく螢の特性を悉してゐると述べて居られる。その詩といふのは

著人疑不熱
集草訝無煙
到來燈下暗
纔往雨中然

といふのであつて螢の光に關する以上の知識は今日でもこの上に餘り出てゐるとも思へない。

螢の種類　吾々の知つてゐる螢は大きい源氏螢と小さい平家螢位であるが、世界には二千種もあるといふし、日本にも三十種もあるが、大部分は婦人が夜會に出る時髪に綠の螢火をつけて寶石の代りにしたといふが、このやうなことは吾々の間では餘りきかないことである。

然し螢といへば何か物語り風な情緒を動かされ大人も子供もこの小さな蟲に淡い親しみをもつてゐるやうに見える。

書見れば首筋赤き螢かな　芭蕉

螢の光る所を解剖して見ると表面は半透明な膜で中には光を發する細胞の層と光を反射する鏡の作用をする細胞層とがある。それらの間に空氣の通る管が澤山に光つてゐて絶えず新しい空氣が通する。發光の原理はまだ不明であるが、發光層に發光酵素があつて空氣中の酸素により酸化されるためとも說明されてゐる。

永劫の光　この光は熱を伴はない冷たい神祕的な綠色な光りで光としては理想的なものである。吾々が、日常使ふ瓦斯は大部分は熱エネルギーとなり極めて小部分が光りとなる。螢とは反對である。螢の光は卵の時にも幼蟲の時も蛹の時も、成蟲になつても光つてゐる。實に永劫の光りである。

何のために螢は光る　なぜ螢は光るのであらうか。敵を防ぐためだとも言はれるが南米の或蛙は螢を澤山食て自分の腹を光らせてゐて、光る蛙だといふ動物學者を迷はせたさうだ、これでは螢の光も防敵の役には立たない、また螢の光るのは雌と雄と相寄るためだといふ、或種類の螢では雌は翅がなくて全く飛べないのがある位だから、雄をよぶには光は役に立つにちがひない。

螢の一代記　終りに螢の一代記を見ることにする。螢は腐つた草から生れるのでもなく、草の露が化するのでもない。やはり卵から生れるのである。螢も他の昆蟲類と同じに四段の一代記をもつてゐる即ち（一）卵（二）幼蟲即ち蛆（三）蛹（四）成蟲即ち螢である。螢の光は永劫の光だと言つたが、地球に螢が創めて生じて以來今日に至るまで世界の暗は一刹那と雖も螢の光によつて照らされなかつたことはないのである。產みつけられた卵が光るばかりでなく、母の胎内にある幼い卵もまた小さい光を放つてゐるのである。螢の絶えない限りこの世は永劫にこの奇しく美しいしかも冷たい綠の光に照らされてゆくであらう。

さて雌は夕方から夜にかけて水際の草や木の根に芥子粒ほどの小さい黃色い卵を三四百も產む。それが一ケ月程たつて孵り蛆となる。蛆即ち幼蟲は自分よりも大きいモノアラガヒ、ナメクジ、カタツムリなどを餌とするのであつて、鋭い齒の先から出る毒液で痲痺させてカタツムリ等の體の液を吸ひ取り大きくなるのである。片山氏といふ恐ろしい病氣を起す原生動物の中間宿である、宮入貝を餌とするものもあるので螢は益蟲である。幼蟲は年を越え翌春、土の中で蛹となり、五、六月螢となつて飛び交ふのである

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな

丈草

私の家の側を流れる石神井川にも毎年澤山に螢が飛ぶ。もう間もなく近所の百姓さんの娘が螢をとりにさそつてくれる。あすこの夜にも金魚やと共に初夏の景物をそへるであらう。メキシコには大きな螢が居て酋長がそれを手や足につけて燈の代りにしたといふし、ブラジルでは足につけて暗い森を行く道しるべにしたといふ、また南米では光らない。普通の螢は翅や體が黑いが胸脊即ち首筋の所が赤い。源氏螢の名は源氏物語りから來たらしく、この源氏に對し平家螢の名が生れたらしいといふことである。源氏螢は體が大きいばかりでなく、赤い首筋に黑い十字の斑があるが、平家螢は首筋に黑い縱條を有つてゐる。

螢はどこで光るか　兩方共光るのは尾端の二つの環節で

御挨拶

青年「これは私の寫眞です、犬と一緒にうつしたのです」

令孃「さう、分りますわ帽子を召してらつしやるのが、あなたでせう」

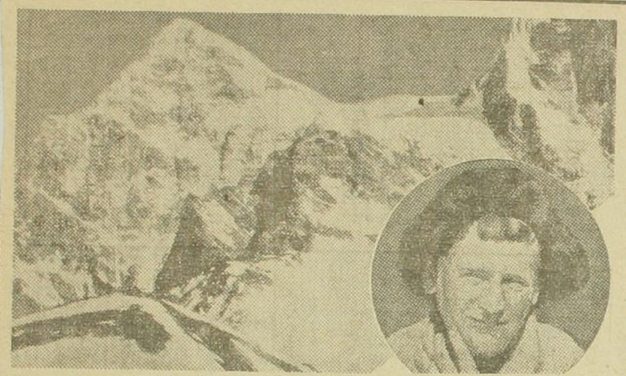
の男に見へなから、決して自分のやうなみすぼらしい
人間ばかりの心あるこの主宰のこゝろの志をとゞめて
見たい、業の地獄（人物があるかもしれぬ。

（第三種郵便物認可）　昭和六年七月六日　（月曜日）

ヒマラヤの巨峰——カメツト遂に征服

英人スマイス氏一行不屈の努力

人類登山の最高記録を築く



【カルカツタ特電五日本社着】「地球の屋根」における大冒險として世界の視聽を集めてゐたヒマラヤの巨峰カメツト（二萬五千四百四十三フイート）を目ざして進發した**英人登山家ヱフ・ヱス・スマイス氏**の一行は東方カメツト氷河から登峰を企て凡一ヶ月にわたり氷と岩との大障壁に向つてあらゆる困難苦闘を續けつゝあつたが遂に六月二十一日スマイス氏をリーダーとしソールズウオース、シプトン及びタイガーと仇名される獵夫レワの四人からなる一隊が遂に**初登頂に成功した**尙この一隊の援護作業に從つてゐたパーテ・グリーン及びガルワル出の獵夫ケサルシングの一隊も次で峰頂を極めた、この記錄は昨年國際調査團がネパール、シツキム及びチベットの三國境にそびゆる**ジョンソン峰**（二萬四千三百四十四フイート）の**征服によつて作られた記錄を拔くこと千フイート以上**に達し**人類が足跡を印した最高の登頂新レコード**である、尙一行は幾多の困難と危險を冒して頂上に活動映畫機を擔ぎあげ全ヒマラヤの大景觀を望む素晴しい背景の下にこの歴史的壯擧をフイルムに收める事が出來た、一行中ソールズウオース及び獵夫のレワは山上の激しい寒氣のため足部に凍傷を受け殊にレワは經過如何では兩爪先を切斷せねばならぬ

（備考）この電報は六月二十八日ベースキャムプにて認められヨシマト部落まで人夫により同地より更に自動車、汽車便などでカルカツタにもたらされ打電されたものである、なほスマイス氏は當年卅歳、英國山岳界の權威、昨年即記カンチエンヂユンガへの國際登山隊に加はつた人である【寫眞はカメツト峰（中央雲におほはれた山）とスマイス氏】

○桜雨流と書室陰樹の折柄、一快の書籍を寄
せまゐらせ、おを脱し、宮内省[illegible]
図書寮●漢籍善本目録一快四冊[illegible]
人て送れと云ふ。北目録収ちる所の図書七百八十
八部皆ち徳川氏収花のうち[illegible]の浴室
の御府に帰しにうこと[illegible]
来歴志、古文書[illegible]
史を有する●図書[illegible]
●来歴を記す、既に巻表紙[illegible]四冊の
内一冊は特に大義経の御[illegible]を[illegible]
行に係ること[illegible]

○前掲長版春信画六歌仙絵の図は終に余が手

複原製

七月十日記

昨年末印

に入る。幹後展て見るに、女一人男五人の六歌仙に
から小町ひとりが一同の扶手まちまちのもおかし
い、素撰法師が乳を絞つてゐる傍に座が後
那から犯してゐるもの、法に憚んでいる僧のしゆこさをそ
も、文鈴黄蝶と立てうい態度であるものは心畫家の
意匠があるかん角取せしめ。何のさと歌聖揃へとは
ら雲雨の間にも和歌もどきの座敷があつてあら
う。どうも表情を考へる点さ[illegible]
すべきやすもの、面白い詞書を工風して擬古版
の印刷に附したん、それを[illegible]
こやのひとことと、式の人を揮して[illegible]
ひまらしあるを得る。

○寛永六年大坂の書林、金屋左右衛門の版行した
鷹の書、仁義規古武士（振拳）は、鷹の図書中抜
書せしものである。鷹は武門の狩猟技芸であるが
う、禽鳥の範囲にそれを研究されたものは、甲
は鷹をもって各々の姿態和強を守りたるは数限
りもなく一時行はれて今日も多く残りてゐる。それが武門
の珍重されし訳なれば、住種を得ること甚だ難し、住種
を得んば之れを養ひとして、その爪を抜いて立つ架
（ねとと云ふ）また金銀を鏤め蒔絵を施しなどして、
人間を遇する以上の取扱をした。之れを飼養し之れ
を操縦するのも、なかなかの研究が積んで、猟犬などと
比べて遜めない。鄭重なる武門技師が

模原製

鷹を据えて「おこ」架に完
てゝ鷹が肩に乗ってある間は、鷹匠は浮かれて動いて鳥
を驚ろかすものである。鷹を放つと高く舞ひ上がって、之れ
を追っていろいろ技をいふやうに、さまざまの作法があつ
て、鷹匠の抱分大役である。北島のハビットを充分
知り抜いて長年の北役は務まるが、なほ猟獲
してから、毎日の操縦訓練し、呼べば立ち
ゆくやうまで教育する。関係が深い。野時分或は終る
自分家の肩を禁として供するのだから、抱分厄
介の役目であると謂はざるを得ない。北条氏の冬籠の
鷹を用いて鶴狩に、羽交操縦疾患、肩と据えやる。

鷹の花称芽と細記しておく。但分は敢て鷹と称味をもつて
みるひめるものが武家時代にうんが世界を比類のない待遇を
受けたことを思ふと、日本養禽の一特例として貴外四
方に示す様今がありうと思つて、性て唐の色を買い集めて
御覧玩賞に供して居る

○昨年の十二月中旬から北紙新報と掲載を始めた余
の浸淡の筆を次つて二百回に近人で
徒らを去ればと毎の新報の到達を待つて、切り抜を
続けつゝも一切の張会ありて、完結しも仕舞へて
見ること、何となく寂寞を感ずる、毎年の夏期さん
何か氣楽な仕事が無ければ一日が苦痛、本年の夏は
ゆつくりと養まぐきや、或の続浸淡を試ちぐきや、

横原製

材料を求むる事を決心、第一に本書を書ひきつい、其分計り
稿の出来てゐる四半稿四隅筆を纏めんが、来年早
大正十年の紀元二千六百年が材料苑集が欠りたや
すくるいっ窮ろ日々録する隨筆を日記中二冊ずゝ
書き続くべきか、即ち北冊子自撰が初びある、今年
ハ北紙新報と宮の稿の為、北小紙はまぐ三巻も
終くるの外、本年中十巻位書いても充
分いるのある

○神田の書店を過ぐ三三の四書を購ふ（七月八日）

大賀勝里新刊三集 宮六冊

北集刊本ニ無く、編んで宮本の価いう
ものあり、家前未刊四書の宮本数十

を載せ、こんも共部に入る能し、未刊本
の写本皆不審也 北六冊共上四と

一 八番歌仗

明治十四年二月九日 従四位 前田利嗣侯
御主催 和歌の催しあり 左の方々出席
忠避 久我建通 前田利鬯 前田利昭
右の方々は堂上 長谷信成 本多
忠質 久世宗避 又 判者は小出秀
実 北書は判者の自筆 又 書式は返
あり 表紙に本多忠質の御記あり

複原製

一 清俞宗禮 吉習住 返回模本

巻末識語に云く

余蒙恩吳門、沅谷先生、敦富勤
有機、次夏日長、揮汗成六十四幅
蓋先生愛素好古、皆其所摘、昔習
行實中住返也、俞回以志、聊當面
石碑全

乾隆乙酉季夏

海上 俞山宗禮 敬

北の画本の大要を知るべし、谷回の上に口口
書住返と、保す、各幅寸法 巾 尺、皆彩色あり、蒙と共く海を華山北書

の原本を借し、愛玩せんを願さいりしと
華山頃後小華の手を帰し、小華寫す
る日、木村利右ニ門に典し、遂に大震火に
逢ひ、此帳模本をも亦原本を
紛失せしを遂る、原本は日本に於て獲
難し、日こん未詳とすべきも、巻頭に論
南蘋の筆家を勧し元沈陽筆
甲子初冬日 源長敬

とあり、長敬なる人なるかを未だ詳かにせ
ず、或は田原藩主か、但し元沈甲子は華
山頃後也、華山不幸の本日を記しとある
うなれば可らざるべし

榛原制

一 測卷一笑 二冊

是れも亦滑稽の文を輯めたること多くは
偶文なれども、此の本草学の輯なる所なも
浪人刑福 改めて山中一多伝と題するもの
なり、安政六年浪華の出来なる
主人訓點を施し雑家を称して世に行
ふ、金毫なれども之れを記して今無し、則ち婚
姻に偶本中に出でたるとなり

一 文義方法錄 二冊

此書一冊花弄を收め他の一冊人相風

[illegible]等を納む、メイシヤと紅摺こ
画の風[illegible]嘉詩歌の詩[illegible]て張ること
[illegible]も赤[illegible]生る、画の和歌、
夢[illegible]、子孫の養い成るこの[illegible]

○原田の[illegible]（嘉納）の紀念[illegible]と共の詩歌を印刷して附し原田
[illegible]国[illegible]始[illegible]来る、原田の字銭[illegible]と[illegible]斎
[illegible]家[illegible]、[illegible]本人[illegible]
[illegible]ら[illegible]木[illegible]漢と云[illegible]と[illegible]共の和歌を
[illegible]ば[illegible]も優し[illegible]味あ[illegible]
和歌の[illegible]べき[illegible]
後世[illegible]

雪虎

これは何んの事はない、揚豆腐を焼き大根おろしで食べるのである、その焼かれた揚豆腐に白い大根おろしのかけられた風情を指して「雪虎」（ゆきとら）と斯う云つたのである、若し大根おろしの代りに季節が冬でゞもあつて、それが葱である場合にはこれを稱して「竹虎」（たけとら）と云ふ、――京都での話である。

これは全く夏向きのもので、朝、晝、晩とその何れに用ひてもよい、先づ揚豆腐の五分位の厚さのもの（東京では生揚と稱へてゐるもの）を餅網に掛けて鼈甲様のコゲのつく程度に焼き、適宜に切り、新鮮な大根卸しを澤山に添へ、いきなり醤油を懸けて食ふ。

白瓜の皮

白瓜――これは「あさうり」とも又「越瓜」とも云ふ、白瓜を賞味するのはこれから當分の間である、この白瓜を薄葛の汁椀などにつくる場合大概はその皮を剝いて捨てゝ仕まふものであるが、その捨てゝ仕まふ皮を食前一時間、糟味噌に漬けて、それで一番うまく漬物通になりすまそうと云ふのである。

バリ〳〵と舌ざはり良く、色青くして夏の夕餉にはそれこそもつてこいである、酒やビールの肴にも申分は無い。この料理は昔から京都人の日常生活に入つてゐる漬物中の一名案なのである、京都の人々は能く知つてゐられる筈である。

鰹中落ち味噌汁

鰹の刺身をつくる場合、鰹を三枚におろすと、中の一枚は所謂中落ちである、この中落ちも大概は打捨てることが多いやうだが、これを捨てないで、骨付の殘肉を、蛤貝か何かで、こそぎ取る、こそぎ取つた肉が三とすれば味噌七位の割合一緒にしたものを摺鉢

で能く摺り裏濾しせずに通常の味噌汁を拵へると同じ方法でこれをこしらへる。鍋の味噌汁が最初に沸騰したとき上に浮いた垢をすくひとり直ちに椀に盛つて出す、この際生薑の絞り汁二三滴落せば更に妙である、中味には大根の千切などが調和する様である。

白瓜の皮の浅漬と云ひ鰹の中落ちの味噌汁と云ひ共に食通をアッと云はすだけの立派な料理であるから御存じ無き向は夢々廃物利用だなんて薄べらな頭を持たないで是こそ立派な意義ある料理だとの首肯から是非とも試みてもらひ度いものである。

豆腐のつべび生活台所を司るものもとより、淋れもり全七のことで餓を凌き、酒を思へば自から河易の不拘を心る。成るべく面倒を厭けて常生の間と会いセで事と済ます、斯る境遇と者つて八、焼味噌でも飯のい喰くる、一本の山葵があんば数日酒がのめる。乾海苔を擦げて冷飯を平らに拡排し、之を海苔巻いて、適当の寸さに切り、酒を飲んで、之を茶碗に入れて茶をかけて食へば、お茶ようまく喰くる。

榛原製

びびとこの必ずしもまずいとは云へない。茶人のいつもつべびのもの美味を解する。まんい頭の働である。偉かん意匠が閃めけば、多く手をかけずとも、うまい料理が出来る。普通葉てるやうな野菜の断片でも、之に適当の味が活きてくる。つべび住居をすんばの料理である。乞食の料理、つべび住居をすんばい料理の出来るのは、茶人的意匠が平凡のものを美味化するからである。茶人の賄い意匠のうまがある魚の腸を細切つて味をつけたものは酒の下拵えなどのうえんがあんばいくらでも酒が飲めるとこのつべび地元がある。こんなものも甚れ簡素の料理

である。乾燥せんと山葵を和し鰹節を和してこねまぜる。こんを錦ぎと名づけもする。えんも荷葉の粉末である。梅干と大根おろしと鰹節を和してすきやる、こんも酒のたれをよい加減を解くれたもよい。そして[illegible]推んまで[illegible]高しと荷葉の調理で而かも第一の利味である。[illegible]いくらでもある。二三の切板の調味も皆各北の戦国のこの例である。

○昨日の早大維持員会は高田前伯爵を名誉伯爵に推し多年の勤労に酬ゆる為十萬円を贈るの決議を為す、除法はゆゆしき会議である、代、伯爵三萬の[illegible]千円を贈るのことゝなった。十

万円のうちを支出し得るやうに大学が発展し[illegible]を慶すべきである。[illegible]年の勤労の[illegible]二三十萬円はあってもよい。出すべきであるが、学校ではそうは行き難い。自分は黄初北の方議をやめくやう、[illegible]の前伯爵のことを[illegible]金はもう[illegible]、吾等は何んの謂れもない。[illegible]吾等は引退して久しく、亦年金をも受けて居るから、[illegible]を云ふて吾等の為すべき[illegible]金の提出をすることを[illegible]、学校の方[illegible]の前伯爵の功を勒して[illegible]学校に初めての[illegible]元老の例を[illegible]

つを得ず、これ西北のすこぶる遠雲と及ばずと、遂に推
蒙満坊一段の可決を見る。此れ吉田前侯者を
名参議に推すの一義を動ずべし、校訂の命ある
所、何人か異論あるべき筈なるも、現に満坊
は之れを可とせざるべからず、大隈の如き一考すべしと
と言ひ出しなば、満坊の面目如何、恐らく大隈は名
参議者の猶口を傷けらるることを厭ふべし
あらざるが、元来大隈の名参議者は血徒和のごと
吉田の如き功労ある名参議者にして、等閑と
推を用ひざるべし、既に功名ある名参議者
参議たるべき、吉田を名参議者と推すは何の
不可かあらん、大隈の文学も去りしきる

七月十日記

○今日帝国博物館カナスボタン十二支を刻して
つまものとなす、中と面を刻して表を
ほり、裏ほり、他に羅馬の古銭
を模したるもの真を亂る、今日も野蛮人なるよ
りなほ小名架に置く。昨の市中を過ぐるに
る所、唯だ二三軒なるのみ、一は金金
物鈕の古物、方形も程伯きす二三分刻字後
かたし、体裁去る在るべし、其他仏像二軒極めて小な
れども作の精巧一は西蔵仏にて金箔を七重に塗る、賊
に真珠を装ひ、紫檀の厨に入れ厨子と共に墓
は椿圓形の宮あり、硝子を装して中を視き得べ

し、他に一体に木彫昆布門を数する係り、丈七八分許
刷子（）也七形紀州外都白檀塗こ此形式の刷子
茶中に多し、亦一種にして多くは他に滑稽味の
ある根付八角形なる鼠を物くんとして桝を代せる
茶の利那鼠逃しても人の肩に迯るの図を刻すやの
時代なり、こんもが茶中のものとす、甚浅土佐の船長
さ七八寸帆日并に櫂数行程、櫂柄を異す、すべて紀
州茶、此品多分日本に於て外人の趣味に投ずんとて
作りなるか、外に自然木の牧牛の図置物多少
手工加りあり、日出八分のこと、おのの茶附属
しなり日六指の巻画也、あるものの趣味あり、以上巨い
数茶中の義務也

○北吹丸所刊行し行英文の日本郵船
分社不動産名称ともいふべきものあり、定都上ハ代
を住まる Rochers Rocks と云ふ人に書
かんとするもの、此人書は海ならも郵船の汽船なる百
四七隻後し五十数の○吳を船に乗り行くも一
程の無味を解し船名の考証を志し行くも結
言するあり、日本の船名に多く地方を附し往々神社
の名を冠するものもあるのみ、外人一流の説を試み
てみるのが一寸おもしろく、日本の歴史をひくこと
の為め毒しいのまん云ふの図目を為す、各頁に
考証に属する俗説あり、表紙に和口を古代の船を画
き船中三味線を兼ふる人物あり、船名の説
為考ハ

振れであつた。此の際余は當事者であるが無言の列席者であつた。双方の論を聞きて大臣の決裁で北海道大學創立の大事は決するのである。文官の責任者であつた大臣の英斷を今も尙ほ我等は感謝して措かぬのである。

政界を退き、早稻田大學に再度總長の重任に就かれたることは高田君晩年の功業を全ふした所以であると思ふて、余は大に賛同する所であつたが、今回勇退の報を聞きて、學界の爲め此者宿を失ふことを惜むで止まぬのである。

高田前總長の功績一斑

市島謙吉

高田總長は病軀劇務に耐へずと百方現職を固辭され、學苑のあらゆる團體から惜まれつゝ遂に辭任さるゝことになつた。學苑に取つては此上のない痛恨事で、校史に特記すべき出來事である。

顧みれば、前總長が吾大學の教導營に與かられたのは、早く明治十五年開校當時から始まつて、本年則ち昭和六年六月に至つて導經營に終始された。或る事故の爲め即ち入開洋行などで時に學校を離れられたことがあつたが、心は一日も離れたことはなく、曾て經營の〻を緩められたことなく、幾んど全生涯を學校に捧げて、拮据怠ることが無つた。公私の學校何れを尋ねて、斯る長期に亘る首腦があらうか。大抵長く校長の位地に在る人は、必ずしも其の人經營家でなく、左右に人あつて經營に當るのが常である。前總長に於ては全くこれとは異つてその人自身が稀有の經營家である。如斯の人を吾大學に得たのは至幸と謂はざるを得ぬ。

そもそも吾等が兄事した小野梓君が帝大卒業の走り出を大隈老侯に紹介したのが、吾大學の全身東京專門學校の起つた所以で、各科の教員が十數揃つてゐたから學校も容易に開始されたのである。これは何寄りの仕合と云ふべきだが、更らに仕合と云ふべきは此等教授の内に一人の經營家のあつたことである。學問優秀の教授に事を缺かないにしても、經營家が無つたとしたら、果して創業期を無難に乘り切り得たであらうか。當時は頗る險惡の時代で、魔の手がしきりに學校の上に動き、動もすれば覆沒の危機に瀕したことが一再ならずあつた。大隈老侯の不敵の豪膽は、大なる後援であつたことは言ふまでもないが、校務を巧みに料理し、山なす怒濤を乘り切る手腕家が居なかつたら、學校の運命に測る可らざるものがあつたのだ。

開校當時の學校の悲況は、今日想像し難いほどのものであつた。當時は教職員の俸給を其月々渡し得ざることが幾回もあつた。何れの學校でも月謝は一圓と極まつてゐた時に、八十錢を增徵することにしたなどは、人は些事とするかも知れんが、學校の運命を持續するには實に大切な問題であつた。狂瀾怒濤を乘り切るにはこれが死活の問題で、學校は八十錢の月謝增額で安定を得たのである。これが爲めに自給自足の道が立つたから、學校の獨立は云はゞ八十錢で買つたやうなものである。吾等は此 を立るために、高田君の寓居に徹夜したなどを追憶すると、悲愴の感に堪へ

ないものがある。此案も勿論高田君の頭腦から發したものである

高田前總長の經營の特徴とも云ふべきは、どこまでも積極的であつて、消極に墮たことは幾んど無い。此點は大隈老侯の主義と常に一致を保つた。隨つて高田君の策したことは皆老侯の快よく納るゝ所となつた。高田君の經營能力は如何にも博大で、どんな困難に對しても曾て屈したことがなく、常に仕事を逐ふて進み、仕事に逐はるゝことは無つた。着眼が慧敏で、いつも時勢に先んじて畫策したから、諸學校の施設のトップを切つてゐる。學校の地歩を進めて大學としたのも、理工科を設けたのも、坪内君をして文科を起さしめたのも、圖書館に重きを置いたのも、簡易な附屬學校を設けたのも、校外教育を開いたのも、皆な君の積極方針から流れ出たもので、其の施設の名譽は君に歸すべきである。君は如何にも仕事好で、一事業を始めんとするには必ず先づ吾等一二幕ぼに君等援くるや否やを問はるゝのが常であつた。吾等が挺身事に當ることを誓ふと幾んど例として閑地に就き吾等を相手に案を練つた。それがなか〳〵周到であつた。唯いつも私學の困難は計畫に要する少からざる資金を得ることで、君も毎々自から陣頭に立つてその蒐集までも敢てした。斯して一事を遂ぐれば幾んど休憩の間もなく、他の計畫に移るのが君の流儀で、經營又經營幾んど寧日が無く、諸般の事業は些は蹉跌なく益々進展し、終に早稲田の王國を形くるに至つた。そして君の餘力は實業にも及び、日清生命保險會社の創設となり、日清印刷會社の創立となり、皆な其の業界に相當の地位を占むるに至つたのも、君の唱首と撫育に據ることを忘れてはならぬ。

早稲田大學の有形的美化は、多く大震災後の經營に係つてゐる。あの大震災に大學は大講堂を失ひ、ラボラトリーを燒き、其他少からざる損害を受けた。その修補が其後着々運んだのみでなく、大隈會館、圖書館、二三講堂、學生倶樂部、大運動場等の大建築大施設が起つて、學校は爲めに面目を一新したが、此等の經營は特に巨額の資を要し、私學の最も難しとする所であつたに拘らず、官私の復興事業に先んじて、逸早く復興を遂げたのみならず、更らに既往に闘きたるものをも大いに加へた。これも勿論高田前總長の企畫に係るものであるが、今度總長に進んだ田中君が輔佐した功は決して没することが出來ない。君の經濟手腕は此等幾多の大事業に發揮し、大なる經營力の持主であることを如實に示した。

尙ほ高田前總長の功績として擧げねばならぬことは、君が校友會の會長として遺憾なく其の職責を盡されたことである。君は各地に校友の會合のある都度遠きを厭はず、如何なる所にも出張した。君の足跡は幾んど全土に及んでゐる。どこの學校の校長が君のやうに頻繁に校友を訪ふた例しがあらうか。母校と卒業生の間に密接の連絡があり、春の如き溫清のあるのは早稲田特有のものと人も許してゐるが、全く君が間斷なく各地に出張した結果に外ならないのである。これに就ての君の多年の勞も決して少なくない

學校の經營殊に私學の經營ほど困難のものは無い。と云ふのは事が智業德の造就にあるからだ。法律の運用で出來ることでなく五露盤勘定で行くものでもない。此點は國家の行政と會社の事務と甚だ其の趣を異にする。統帥たる總長は學徒の師表たる實が無ればならぬ。多くの教授を指導する識見が無くてはならぬ。單に

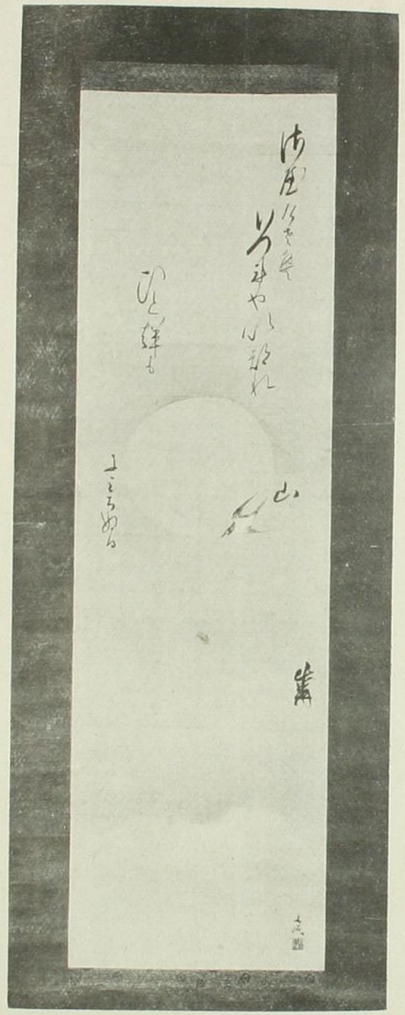
榛原製

以下

12丁

白紙

樣原製



谷文晁月二時鳥圖　樂翁賛

東京　宮崎光太郎氏藏

閲覧室

橋原製